明治廿九年十一月廿五日

女學雜誌

第四百三十號

第四百三十號目次

社告

◉本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◉十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女界教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

○本誌の定價の割合に廉ならざるは、特に遺憾とする所なり、然れども事務に迂なる吾等の事業に於ては之を如何んとすると能はず。即ち、定價は元の如く、一冊無郵稅十錢に定むべし。

○單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし。

女學雜誌定價表

前金	壹冊　價　金拾錢 一年前金　金貳圓(無郵稅)
廣告料	一行　一回(廿十字詰)　前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

前號 第四百二十九號目次

明治女學校新築費義捐水彩畫展覽會廣告（日延十二月十三日迄）

明治女學校は府下にある私立女學校中屈指の一にて多年女子教育に熱心盡力せしに曩に不幸にして類燒の厄に罹り十年の經營一夜にして灰燼に歸せり加之校長は同時に其伉儷を失ひ内外の憂患重ね到り悲痛殆んど究る然るに該校同志の决心彌よ固く速に再築に從事し且つ一層其職務に盡瘁せんとて直に校長の名を以て左の告白文を公に登られたり

明治女學校は今を距ること十又二年（時正に明治十八年八月）世間未だ吾國人の私立に成れる女學校あらざりし時木村熊二、島田三郎、田口卯吉の諸氏其他及び不肖善治が發起創立したる者也。之より先き女學校の官立に成るもの若くは外國宣教師諸君の設置に係る者はありしが、民間士人獨立の力を擧げて新文明と吾國風とに適應したる女學校を開設せしものはあらざりし也。此に於て諸氏慨然として此發起あり、爾來十又二年、初一の精神を貫き、官に倚らず、外國會社の補助を要めず、單に同情同感ある吾同胞國民に訴へ困厄窮乏の間に漸やく發育して卒業生を出すこと一百六十名に超え、多年の精神次第に貫徹して今や全國到る所に校友あらざるはなし。就中三井銀行の諸氏は久しく懇志を垂れ昨年に及では、三井高保氏金三千圓を寄附せられ、其他某々の諸氏（其名を公にするを好み玉はず故に明記せず）尤も同情を垂れて内外の助勢彌よ加はり、此年に至て吾明治女學校は俄然一段の發達を遂け、前途の春色大に動きて將に近く爛熳たる光景を呈せんとせしに、今茲二月五日隣家火を發し、不幸類燒の厄に會ひ、校舍、別舍、教師館、忽然として烏有に歸し、藏書器械悉皆燒滅し、多年の經營一朝にして焦土となりぬ。然れども、吾等が女學に對して感慨する所は尋常にあらず、素より一敗の故に挫折すべけんや。今や吾等が職責は寧ろ一層重大となれるを覺ゆ、則ち彌よ奮つて倍々斯道の爲に鞠躬盡力せんことを期圖するの念や勃々たり。幸にして三井家再應の助力により同番地内の幾舍を假用して授業を續くるを得災後十日既に讀書の聲を復し現に依然として平日の如くなるも、速に新校舍を再築し器械を整頓し四方の望に副んことを熱望すること太だ切なり。仰ぎ願くは吾國同胞の諸君、徐ろに吾等十有餘年の經營を吟味し、一片の赤誠只唯だ斯道に盡瘁せんことを望んで他意なきの情懷を察せられ、幸に義捐を寄せて校舍再築の擧を助けられんことを謹て切願す。

吾等其精神の熱烈に感じ茲に在京濱名家諸君の賛助を得て水彩畫展覽會を催し收入を擧て同校の新築費に寄附せんとす世上の仁人冀くは左の概則を吟味して隆んに惠助合力せられんことを

一 此發起に賛成し水彩畫を出品せらるゝ諸君の姓名は左の如し

石井重賢君	印藤眞楯君	石川欽一郎君	本多錦吉郎君	本多忠保君	東城鉦太郎君	岡精一君
渡邊文三郎君	渡部憲也君	和田英作君	河久保正名君	龜井至一君	玉置金司君	高橋勝藏君
高橋源吾君	久米桂一郎君	小山正太郎君	五姓田芳柳君	淺井忠君	有吉秀太君	佐々木三六君
齋藤知三君	小代爲重君	平木政次君	樋口艶之助君			

（其他御協議中の諸君數多あれども御回答未着に付省く）

二 右諸君揮毫の水彩畫を來る十一月廿日より十二月十三日迄上野公園内舊博覽會第五號館（明治美術會陳列館内）に陳列し公衆の覽に供ふ

三 切符甲乙丙三種を製し仁人諸君の購求を仰ぐ

甲は一枚二圓展覽會に於て籤を抽き其の番號に隨て出品の繪畫一枚宛を展覽會閉會後に受取るものとす 但し此劵は物數三百枚に限る

乙は一枚三十錢。展覽會開會中何回にても自由に來り覽ることを得るものとす

丙は一枚三錢。一日の觀覽者の爲に供ふ

四 右切符御引受被下候仁は左の所に寸報ありたし直ちに持參御屆け申上べく候

東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

發起人

岩村透　林蓊　渡部鍬太郎　松井昇　神中糸子

早稻田文學

第二十二號　十一月十五日發行

●論説●石井兄弟敵討淨るり　竹の家主人　●默阿彌以前の作者　青々園　●鎌倉時代の散文（承前）　海野詮數　●傳記●戀八卦柱曆の性格論補遺　不倒　春曙　●脚本●小説●枯野の眞葛生　不倒　●世間（五）　柳浪　●詩歌俳諧　諸名家　●彙報

◎文學界●小説批評の變遷○默阿彌時代○戰鬪時代○偶感漫評○短評時代○新作小說○新作者歡迎○作者志望者の現狀○合評流行○文壇消息◎宗教界●邦人の宗教心に對する解釋○ニコライ主教の談話○貴族と信仰○宗教に對する三種の意見◎劇界●本月の劇壇○世話物の意義○維新以來の世話物○河竹默阿彌○默阿彌以前の作○團菊左の近狀○維新事件の作○外人の團州評○道具及衣裝○梨園片々◎新聞雜誌文學細見◎新刊

●雜俎●一筆申上候（白人）○『檜椎三重帷子』のおさゐに就て（桃居）○文藝倶樂部第十二編○國樂の起原及發達（東儀季治）○新雜誌月旦○讀書眼○よしなしこと○漢詩四首○題白雲詩集

定價一部郵稅共前金十錢　六部　五十七錢　十二部　一圓八錢

發行所　東京牛込區大久保余丁町百十二番地　早稻田文學社

（每月壹回十日發行）

帝國文學

十一月十日發行　第貳卷第十一

●四六文の起伏　白河次郎　●假字文の起源（完）　文學士武島羽衣　●文學に於ける厭世觀　太波漁郎　●盆踊長崎團扇繪（完）　綠堂野史　●手なれ琴（正）　文學士武島羽衣　●新俳句　詩十數　●ダンテが神曲　●科學と文學　中の自然（完）　柳村　●獨乙の散文（完）　青木昌吉　●清水濱臣の朝敵辨　平出鏗次郎　●新詩●詩體　家に告ぐ●大に作者に望む●今の文壇に望む●詩の末技●評論と品騭●脫化と模擬●俳壇の近況●星社の衰亡●槐青二公に望む●講本としての劇詩●俗謠の採集●外國語の修養●辭書の出版●俗語文典○帝國文學記者の謬見●亂ル、亂ス、いで、いざの辨●無用の爭論●片々●帝國大學の入學規程追加●『日本』の時文記者に告ぐ◎海外騷壇●獨乙自然派の抒情詩人○フォルッ○ブライブトロイ○マッカイ◎批評●文學その折々●海軍圖説●新小說第四號●青葡萄●浮木丸●かご枕●重盛●方丈記評釋●青年國學者の二雜誌其他

定價　壹冊は金拾錢　六冊　金五拾五錢　貳冊　金壹圓

郵稅　每壹冊金壹錢　但し前金にあらざれば發送せず

電話番號（貳七參番）　發行所　東京市日本橋區銀坐壹丁目廿二番地　大日本圖書株式會社

社會學會設立の趣旨大要

夫れ社會學は社會的諸學科の基く所にして人間の歴史的發達一般社會の進化開展の理法を究め親しく實際社會の生活を調査し將來社會改良の方針を示すものたり見よ歐米諸國の時論は社會學に集注し今日の學理界は社會問題の時代なりと稱せらる而して如今我邦貧富漸く懸隔し來りて貧民問題起り地主と小作人との關係穩かならずして土地問題起り資本家と勞働者と相衝突して勞働問題起らんとするの現象少なからず是れ豈に由々しき一大事に非ずや此時に當り一方には社會學の原理を究め他方には實際社會の生活を調査し之を未發に預防するの必要なる辯を俟たずして明かなり社會政策としては社會主義の歴史より社會黨の運動を察し慈善事業としては孤兒院救助院等の發達を尋ね犯罪の救治監獄の改良より風俗氣質宗敎の如き社會心理的現象を視察し以て社會學上より之を論議し之を攻究せざるべからず吾人は深く時勢に感ずる所あり茲に社會學會を設立し科學的見地をもて諸般の社會學的問題を議せんと欲す仰ぎ願くは江湖有識の士吾人の微志を贊同し相共に協力補助せられんことを

十一月

社會學會

右主幹　静淵　布川孫一

特別賛助員(いろは順)

嚴本善治君　本多庸一君　戸川安宅君
横井時雄君　横山雅男君　田口卯吉君
大西祝君　加藤弘之君　呉文聰君
三宅雄次郎君　島田三郎君

社會學會規則摘要

一 本會は社會學の原理、社會主義、社會問題等を攻究するを以て目的とす

一 本會の趣旨を貫徹するの方法は講演及雜誌發刊の二とす講演は春秋二回開會す臨時茶話會を催す。雜誌は毎年四回、三月六月九月十二月發行す「社會學雜誌」と名く

一 本會の目的に同意の者は何人と雖も入會することを得入會せんと欲する者は住所姓名を詳記し之を事務所に通知すべし

一 本會々員は會費半ヶ年分金五十錢一ヶ年分金一圓を本會事務所に宛て一月七月の兩度に收むべし三ヶ月分二十五錢宛收むるも妨けなし
但在地方者にして新たに入會する時は入會申込と同時に半ヶ年分を收むべし)

一 雜誌は當分四季一回發行して會員に頒布す會員外の有志者は一冊に付三十錢送付すれば呈すべし

一 本會の趣旨を贊成し半ヶ年金一圓五十錢一ヶ年金三圓を收むるを維持員とす

一 會員は通常會の講演に出席し寄書質問等を爲すことを得

一 事務所は東京市下六番町六番地に置く

附、雜誌發行に至るまでの記事報告は「日本宗敎」に掲載す、第一通常會及雜誌初號發行は來春とす、會費は來一月よりの計算とす

◎廣く會員を募集す◎

社會學會事務所　東京市麹町區下六番町六番地

女學雜誌
第四百參拾號

社説

明治二十九年十一月廿五日發兌

家外の風雨

風雨大いに起り、怒號激聲すさまじき光景の時、靜に家内に安住するものは、如何に建築の防禦の忝なきかに念ひ到るなるべし。仰いでは歎ずらく、もし此の屋根なからんには、吾はかの篠衝く大雨に打るるなり。もし此の圍なくんば、吾はかの暴風に吹かるるなり。感謝すべし、但だ此の屋根、此の圍、此の家居あるを以ての故に、斯の如く安全なるを得ると。寧ろ、茗を煎じ、甘を喫して、風雨の景色を賞美し、却つてもつて之を眺めとして、團欒の語り草となさんとす。豈に是れ建築の賜にはあらずや。

翻つて思ふに、今の世の變遷は猶ほ風雨の激烈なるが如し。卒然として到り、汎然として潤す。渠等の一過する所、俄然として光景を一變せざるとなし。看よ、鐵道の山を穿ち、川を渡る所、天固の嶮壁容易に破られて、古來の殊俗旬日にして混同せらる。一線の電絲の架る所、無形に走り、無音に響き、忽ちにして南北の思想を一樣にす。夫れ、格は固着の故に定まり、價は保守の故に維持せらるるとの多きものを、文明の利器東西を混和しては、一朝、激變の改動あり、價格忽ち上下して、貧富一夕の間に代り、風俗激變し、民情、大に移り、昔日の光景、日ならずして全く異樣を呈せん。此時に方りて、人心の浮薄ならざるは稀なり。

大凡そ、過渡變移の時代に際しては、人心皆な浮かれ、風俗流動し、堅固の氣象自から衰へて、德義の思想甚だしく廢たるもの也。此れ、通俗の人情、保守によりて品格を維持し、習慣によりて、制裁を刺激するの故による。然るに、一朝、世波動搖し、思潮激變し、在來の堤防破壞して、流化汎濫するに及べば、風俗の其の常を失ひ、人情の其度を超え、信義、道德の大いに亂雜せんとは、當然の數なるべし。維新以來に

激調あり。近來、鐵道の布設によりて更に一層の激變を增さんとするは、即ち此の理由に因る。

左らば人々之を如何んとかする。若くは、全く此等の變化なからしめんとする乎、是れ進步を希ふものの度量にはあらじ。苟くも、進步を望まば、一と度は、這般の危機を經過せざる可らず。喩ふるに、猶ほ宏道に橋梁あり、谿谷あり、斷岸あるが如し。幾度びか、危路を履むとなくして、如何ぞ其の步みを進むるとを得んや。

果して然らば、風雨を防ぐに、家屋を以てするが如く、世間の激變に對しては、但だ家庭の安全を以て其の惡結果を矯めなん耳。天地風雨なき能はず、風雨は其調、激にして其の力は和にあり。人世進步の爲の動亂も亦た風雨の如きか。此の風雨なからしむべからず、又、なからしむる能はず、但だ別に家庭の保護を以て、其の危きを去りて、其利を收むるとを得ん。

故に、文明激進の代にありては、家庭の保安尤も肝要なり。其の四壁を堅牢にし、其の感化を有力にして、以て屋外の惡風習に染ましめず、反つて其の勢力を外發して、徐ろに社會の調和改善を促がすに至らしむべき也。

且つ夫れ、社會いよ〱繁劇なれば、名士いよ〱繁忙なり。名士いよ〱繁忙にして、其の感化力の家庭に及ぼすと、いよ〱薄し。名士の多くは、其の子女と團欒して、靜かに敎化の風采を施すと能はざるべし。此に於てか、名士の子多くは不肖、天禀の才德一代にして絕えなんとす。但だ夫れ之を維持して而して伸張し、自から敎化の任を負ふて子女を賢良にするものは、即ち、內君これ也。名士の家庭敎育は、舉げて其の夫人の責にありと謂はざる可らず。此を以て、名家の家庭に善き內助者を欠かば、其子は中等人以下の子にだも劣るべし。もし善き內助者を得ば、其子は名士其人よりも更に優るべし。これ、既に種を得て又尙ほ其敎を受るが爲也。

左れば、文明激進の代に於ける家庭は、一層堅固ならざる可らず。名子繁忙の家に於ける敎育は、一層夫人の力を要むるならん。一言するに、只だ家庭裡の勢力、よく其の害を防きて、其利を收む。看よ、風雨に屹立せる家屋を。婦人、豈に死せる建築にだも劣る可けんや。

風習に染ましめず、反つて其の

女學

男子女學を知るの用

眞人に對する妻の務めは、古今の説客が説き盡して殆んと遺憾なき處なり、此上は努めて之を實行する外あらざるべし。然るに妻に對する眞人の務に至つては、古往今來、説諭したるものを聞くこと稀れなり。此は眞人に其の務めなしと云ふの譯か。もしくは、更ためて説諭する迄でもなし、天下の眞人、悉皆立派に實行しつゝありと云ふの譯か。余惟ふに、二つながら然からざるなり。

古來我國の道德は、上に在る人の下に臨んで訓示したるに由來するが多し。こゝを以て、下より目上に對して恭敬尊重の意を表すべきことを只管らに要求し、順服奉仕の心得を説くことは極めて嚴重なれども、在上者が其下に對して盡すべき義務を談ずるときは至つて尠なし。眞人其妻に對するの務を説くことの稀なるも、等しく此の邊の理由より來れり。

蓋し東洋風豪傑の眼中には、妻に對しての務など云ふ其「務」の一字既に癪にさはることとなるべし。併し乍ら、倫理最上の感覺には、他人に對して義務を論ずるのみならず、我自己に對してすら亦た此の義務あることを承知し、更に進んでは、下等動物に對する吾等の義務を論ずるすら明確なるに、ひとり一生の同伴者たる吾妻に對しては、其務を問はざらんとする乎。抑も何の故に豪傑風なるか。不審なきを得ず。よし去らば豪傑君、君が多感多情の衷心に問へ。外面殊更らに冷々たる放言罵詈の下に、終生一身を吾に托したる殊勝の貞人に對しては、棄がたき忘れがたきの眞心はあるべし。かゝる眞心こそ反つて外面無頓着の豪傑君には多かるなれ。余は、此眞心の發動を指ざして、眞人、其の妻に對する務の感覺と云ふ。

淚を飲みて、わざと此の感覺を人前に隱さんとするの男子はあるべし。これは、女々しからじと見する瘠我慢の故にもより、二つには、小舅小姑に男氣を見せんとしたる結果なるべし。故に余は惣て此等外部の修飾を透して、男子眞面目の本懷に立ち入り、彼等眞人となりて其妻に對する眞心のなきも

のはあらずと覺とり、玆に喝破して直ちに『妻に對する務』と云ふ。則はち、此務を施こすの手段方法を講ずるは、强ち彼等の嫌らふ所にはあらじ。多分、見ぬ風をして密かに一讀するの情合はあるべし。

凡そ男子には何處となく放埒の氣性あるものなれども、女子は生れ乍ら眞實の情ありて、男性に比較しては、餘程、正直に且つ一圖一徹なるものなり。むかし、近松門左衛門は此處の秘訣を承知して種々の心中ものを作りたり。かつて『女はわれひと思ひ返しの成らぬもの』と言はせたるも、是なり。されば男子にして能く此の要緊に中たり、女性本來の粹に適應すべき處置を施こすことあらば、女は直ちに一生懸命となり、萬事の不都合を踏み破り、劍山血地に飛び入つて、一つある生命を二つも三つも投げ出してまで助力すべし。然るを況んや吾が終生の良人たる人に對してをや。良人にして若し妻に處するの道を知らば、天下には凡そ惡しき妻はなかるべきなり、何れも皆全心を捧げて熱愛の內助者となるべきに、惜しい哉、世の常の男子少しも婦人の心意氣を知らず、亦之を知らんともせず、頭ごなしに我流の筆法を揮るつて、事々に婦人の感情を破ぶりて之に活動を望むは無理の甚しきものなり。男子には大抵野心又は企業心のあるもの故、たとひ感情の上に大愉快を感ぜざる時も、相應の活動は爲すべし。ひとり女性に至りては、惟一に求むる所、人の愛好にして、就中、人の妻たるものに於ては、其良人の濃やかなる同情と信切とに在るとゆゑ、もしも一旦此の肝腎の要素を受ることの止まんには、機關の運轉に蒸氣を缺けると均としく、直ちに活動の氣沮喪すべし。既に此の中心の刺激沮喪せは、快濶なる婦人も自づと憂鬱となり、所謂遣りてと稱する働らき手も久しからず馬鹿々々敷を感ずるに至るべし。斯なりたる婦女子は、其の粹を枯らしたる者なり。熱愛大に減じ、執心過半失せ、思ひ込む事も、盡力する事も、薄弱となるべし。何んぞ況んや、一生懸命、生命懸の働らきに於て內助することあらん。

故に良人に善き內助の妻なきは、必ずしも妻の罪にあらず。其過ちは無論双方の失策なれども、もし比較して言へば良人こそ其罪を餘計に負べき筈なるに、今の男子は反つて悉皆之を婦女子の過ちに歸し、甚しきは女子敎育の過ちに歸せんと

す。男子の暗愚も茲に至りて極れりと云はざる可らず。又、今の論者は心理學を喋々すれども、人生半數、若しくは半數以上の活力たる女性の心理を研究せず、反つて猿猴を材料として甘んずるは何故ぞや、余輩の解しがたき所なり。今の論者は、婦女子が家政學を研究すべき事に就きて仔細に且つ熱心に論辯せらる。こは素より可し。然し乍から、家政學を學びたる婦女子が實際の主婦となり、イザ之より一家の家庭を整理せんとするの曉、良人たるもの多くは主婦の事業を妨害し、又は其の熱心を挫く。此は、良人に心ありて態と爲すにはあらざる事明白なれども、既に前述する如く、良人、妻に對して處するの道を誤まる時は、其結果として自づから此の如き影響を來たすべし。果して然らば、家政學を學んだる効驗も十分に發揮せず、其の責めは、主婦の負ふ處となり、主婦の負ふ處は即ち今の家政學教授の負ふ處なれども、審らかに其由來を穿鑿すれば、良人にも亦此の責めを分つ可き過ちのあることは明らかに知らるべし。左れば、良人も亦『妻に處して其の家政實行の便を與ふる道如何にすべき乎』を學び置かざる可らず。女學生が其家政學を學ぶと同時に、家政學實行の人を助くる道を學ばんことは、蓋し、文明世界の理想の一つなるべし。

左らば男子たるもの如何にして此の道を學ばん乎と云ふに、幾多の道筋あり、手段あり、之を得ること決して至難の事にはあらず。但だ先づ男子此に心懸けて其研究に注意するをもて要となす。況てや、良人の其の妻に於ける、日夜居をともにして事として見聞せざるなし、もし心を注いで考ふれば、妻の氣質を見拔く程の事に何の難き事かあらん。然るに滔々たる良人の比々として此の一事に暗きは、詮ずる所、能はざるにはあらず勉めざるなり。勉めざるにはあらず、馬鹿にするなり。『何の女が』といふ見識にて冒頭より之を輕蔑し、彼は如何樣にしても見下げるの情なきにあらず。此上なき不都合の見解と云はざる可からず、良人の取扱の如何樣にてあらんに關せず、絶えず貞思を寄せて忠實かに立働らく婦人もなきにあらねど、そは格外の賢女として之を普通一般の女子に求むべからず。男子が之を賞賛するは宜しけれども、之を見本にして吾が妻に要求し、良人たる自己の完全を盡さずして、唯獨り之を妻に求むるに至つては、大丈夫の心掛と謂ふ

可からざるなり。

扨て仔細に女の氣質を考ふれば、其活動の元となり、刺戟の種となる急所を看破すると難きにあらず。此の急所は、女の身に取りては其の長所にして亦た短所なれば是によつて、強くもなり亦た弱くもなる。若し之を刺激せざるときは非常の勇氣を發作する代はりには、此の急所を押へたる人に對しては如何んとも爲し難きものとなるべし、些か不快の例證ながら、止むことを得ず、今日の實際に就て其例を擧くれば、方今日本の男子にして此の秘訣を知るものは即はち所謂る遊び人あるのみ。彼等が婦女子を殺活する伎倆は慘まじきものにて、傍觀者の眼より看れば、何故あれ程の痴男子にさる磁石力ありやと奇しまるゝことなれども、畢竟は此急所の「コツ」を知り居るが爲めなるべし、夫れ、至誠熱血なき輕薄男子すら、其道を知るときは、尙ほ斯の如し。然るに、情けあり、誠ある眞實の男子にして、本心決して其妻を酷遇するにあらざるも、但其知識なきによつて着々女性の要緊にはづれ、彼をして知らず識らず不快不滿を感ぜしめ、其の勇氣を半ば喪なはしめ、以て家庭機關の運轉に一種の澁滯を來らするは惜しむ可きことにあらずや。

試みに尋常の主婦達が互に打明け話を聞け、皆男子が女氣を知らざるの不平を漏らして止まず、何故に斯くも思ひ遣りのあらせられぬ事かと不審禁ぜざるの躰なり。女は存外に人の心を讀むものにて、事件の觀察には鈍けれども、人情の推察には太だ機敏なれば、男子が此の點に於て遲鈍なるを奇しむも無理にはあらず。

然しながら男子決して遲鈍にあらず、但だ輕蔑して注意せざるの致す所なれば、玆に一旦飜然として此の種の觀察に心を凝めなば、日ならずして發明する所あるべし。亦た余輩の分解することを須ゐざるなり。余輩は但だ男子諸君に向つて此の程の觀察を馬鹿にすることなかれと警告すれば足れり。

左れど、終はりに臨んで一二實際の注意をなすことも亦た無用にはあらじ。前段陳ずる所の所謂る女性の急所は、乞ふ人々の看破する所に任かせん、之れを筆紙に盡くす可きものにあらざれはなり。然しながら如何なる婦人にも通じて切要なり、亦た如何なる婦人も之れを得て最大悅喜を爲すは、言

ふ迄でもなく『同情』と『愛好』と是れなり。

もし此の二つを缺ぐ時は、婦女子は生くれども猶ほ半死の如し。もし此の二つを得る時は、婦女子は如何なる難みの地にも慶びの席に侍るが如し。此の二つは、婦女子に活を入るゝの精神なり。婦女子を若やかする香ひの如し。此れを得て此に滿足しつゝある婦女子は生々として何處となくにぎやかに、色澤自づからつやゝかなり。此に餓ゑて中心不滿を感じつゝある婦女子は、たとひ錦繡を重ねて榮華に厭足れる身分にても、何となく生氣失せて元氣なし。香芳の消えたる白薔薇の如きか。古人が『男子の身に取りては情愛は只だ一事件に過ぎざれども、女子に取りては終身一生の總ての最大事なり』と言ひしは、味ひある名句なり。

左れば、良人たるもの、妻が喜憂する所を察して、之に同情を寄せ、又、中心の情愛を隱さずして十分に開露し、日々常住の最と些細なる事にも思ひ遣りを示めして吾が眞心を顯はすべし。凡そ、人情の滿足は至つて些細なる處に存し、理窟をもつて言はゞ一笑の外なき位の事に情合の一大事は存するものゆゑ、男子の無頓着をもつて、之を度外に置くことなく、心して其喜憂に同感を寄すべし。但し、婦女子は元來ねつきものゆゑ、男子のねつきは餘り好まざるものなり。男子は外見磊落素朴にして半は無頓着なるかのごとき處ありて、意外にも濃やかなる情愛の折々顯はれてこそ床しけれ。之を雲龍彷彿として爪を現はし、蜻蜓、時々、水に點ずるの狀に喩ふ、所謂サラリとして、而かも眞實なる爲躰これ也。左れば男子が同情を示めし。愛好を顯するも亦た斯くの如く、或時は、有言に優るの無言を以てし、又或る時は無言のみにて慊たらざるの情を有言にて滿足せしむ可し。婦人が『男は氣樂なものにて芋の煮たも御存知ない』と言ふは、半ば不平にして、半ば感服なり、常にムシヤクシヤとしてもつれ易き吾女心に比べ、男は氣の大きい者と感服するは、婦人一般の習はせなれば、此の感服の心を破らざる程に男子のこましやくれたるは其の尤とも嫌らふ所なれども、左りとて亦た吾が至極の苦辛を一向に察せず、何時も平氣の平三郎として些との同情もあらせぬかと思へば、氣も張も拔けて泣かんとする迄でに心細くなるべし、然らば男子の處置風も難い哉、ねつからずしてねつかれとは如何の調子ぞと奇しまるゝ者もあるべし。

他なし、男子らしき雄々しき心もて、其の男らしき親切の情と愛好とを發揮すれば即はち斯の如くなるべし、強いて製造するに及ばぬ事なり。

世には妻を愛好すれば直ちにツケ上るもの丶如く考へ、七代まで女には齒を見せるなど言ひ囃したることあり。男子には不似合の言ひ分と申すべし。愛好は侮るゝにあらず。男子もし情けある良人の道を盡くして、其の妻を賢夫人たらしめんとせば、愛好を示めし、愛好を寄するにも、其の間自から禮儀なかる可からず。既に禮儀あり、夫婦互ひに敬意を表して無限の愛情を有限の規律を通うして交通するに當つては、豈に其間に忌はしき結果を生ずるの患あらんや。

且つ、夫れ婦女子の身に取りては、其良人に服し、其良人に從ふこと能はざるほど不愉快なるはなし。世には牝雞の晨するに喩へて、亭主を後に遣る頑婦あることを誹る人もあれど、牝雞の事は鳥類ゆゑ暫らく言はず、斯る頑婦とても其良人を良人として、立てゝ行くことの出來ぬを何よりの遺憾とするものなり。男子は其妻を壓せんとするの天性あり。女子は其良人に從はんとするの天性あり。女子の好む所は、從順悅服して、其良人を崇がめ、人中に出だしては男を賣らせ、家に在つては自由に吾身を支配せられんことなり。總じて女の情、自己の女心を嫌らひ、我が我儘の自から制し難きに苦勞するものなれば、之を壓倒して吾が我を取ひしぎ（但し親切に取ひしぎ）以て從順なる貞女とならしめ給へと希望するものなれば、強情なる女性ほど、良人の強き意志を崇拜す、たま〳〵羈を脫して我儘を主張し、良人に抵抗して我を張り通さんとすることもあれど、そは一時の激昂にして則はち自から制し難きの結果なり。雷收まり雨止まば、自から後悔して深く己れを嫌らひ、いよ〳〵以て良人の鐵腕を希望するによつて妻の我儘を增長せしむる如きは、第一、良人の意思薄弱にして處置の當を得ざるのみか、妻たる本人自身に於ても決して悅びとせざる處ならん。蓋し藥は即ち毒にして、毒は即はち藥なり。分量の加減を誤りて人を害するは、人世の萬事皆然かり。死物にあらざる活人間たる以上は、其邊の切盛を宜しくすべきことは、勿論の事なり。

宣教師派女學校の一長所と
現今我教育界の一缺點

増野悦興

論文の劈頭に於て説明を要するは、宣教師派なる言葉なるべし。我邦基督教の內狀に通ぜざる人々は、其數の元と外國宣教師に由りて傳へられ、今日に在ても教會內重要の地位は宣教師に由りてのみ占めらるゝ如き觀あるより、基督教全躰は即ち宣教師派にして、宣教師派とはツマリ基督教派と同一の意義ならんなど速斷すべきなれども、是れ大に非なり、我邦の基督教も已に三十歲の齡を有するからには、其相應の發達を遂げ內部の組織亦思ひの外に複雜を極め居るなり。今ま本邦教徒と外國宣教師とが、諸の機關(教會、傳道局、學校等)の運轉上に於て有する關係を陳ぶれば、大約左の三種あり。

1 宣教師其主權を握り、本邦人は傭人に過ぎざるもの。
2 本邦人其主權を握り、宣教師は傭人に過ぎざるもの。
3 本邦人と宣教師との協働に成れるもの。

是なり。此三種の關係に準じて、普通に基督教主義女學校と呼ばるゝものを分類し、同時に各自の特質を指摘せんに。

(イ)獨立派女學校　本邦人其主權を握り宣教師は傭人に過ぎざる種類の女學校は、槪して其校長に知名の教育家を戴くを常となせり、此種の女學校の起原を尋ぬれば、多くは現任校長たる教育家其人が、一方には官公立女學校の教育法に滿足せず、他方には宣教師派女學校の教育法に慊たらず、自己の理想せる教育法を實施せんが爲に、自ら創業の任を負ふて起せしものにして、又稀には同樣の感を抱ける有志の士相集りて設立の計畫を爲し、學德兼備はり教育に堪能なる人物を聘して教務一切を委任せしものも有るあり。此種の女學校は其維持に於ても、本邦人のみを賴とする傾きあるが故に、自づから資本の基礎厚からず、財政困難を告け、天晴校長の教育意見も其幾部は實成の期無くして止む場合無きに非れども、然かも校長自身女學校を以て自家の事業と思惟し、犧牲的精神を以て事に當れるが故に、其下に薰陶せらるゝ女生徒も自ら化せられて亦校を思ふの心篤く、各自の勉學に熱心なるに加へ、校の主義目的を賛助して校長の志を成し度しとの念を有し、已れ學校より益を受くのみにては未だ足らず、何とかして學校に對し應分の益を與へ度しとの希望を抱きつゝ、學窓の生涯を送れるなり。

(ロ)協同派女學校　本邦人外國宣教師、兩々相並んで主權を握れる女學校には、第一資本の欠乏の爲めに惱まさるゝ憂無し、何となれば困難の場合には訴ふべき海外の有志資本家を有すればなり、同時に本邦人が事業の半分を負擔せる結果、日本古來の好習現今の美俗等も充分斟酌して校の方針を定め得る便益あり、此點に關し大なる誤謬に陷らざるを得。唯此種の學校に於ける最大困難は、主權者なる本邦人と同じ地位に在る外國宣教師との間に於ける、圓滑なる關係を保持する甚た難き事なり、兩雄並び立たずと云へる語を此所に適用するはチト大層なる可けれども、何樣風俗も異り習慣も異る國土に成長したる二人が、各々學校を思ふ心より熱心其意見を主張するとなれば、或は衝突を來す場合無しとせず可らず、其悲しむべき結果を惹起すに當てや、協同組織一朝に破れて復た繼かず、左無くば相方より讓歩又讓歩の末彼我の長所全く埋沒して、虻ともつかず蜂ともつかざる校の方針を造出すに至るなり。併し內外人各其人を得て、始終圓滑の關係保持せらるゝ場合に於ては、二人を通して內外の粹一校の方針上に集り來るが故に、到底他種の女學校に於て見る可らざる好成跡を見るに至るとも、亦之れ無きに非ざるなり。

(ハ)宣教師派女學校　に至ては、本邦人の主權者無き爲め、教育の方針動もすれば外國風に傾き過ぐる弊無きに非るも、然かも本邦人の主權者なきは本邦人の分子無きの意義に非ず、世間の廣き、此種の女學校の卒業生は、日本文の手紙も認め得ず、裁縫も爲し得ざる如き、不具なる婦人のみならんなど思ひ居る人あらば、其は大なる誤謬なり、資本に屈托無きに任せ高額なる給料を拂ふて、高等師範學校女子部卒業生、帝國大學古典講習科得業生、若くは知名の和學者漢學者等有力の教員を傭込み、其れ〲の教授を囑托せる結果、和漢文學の如き思ひの外なる進步を爲し居れり、裁縫に至ても同じく善き師匠の下に昇進の見る可きもの無きに非ず。唯、校長其人が自身是等の學藝に通ぜざるより、自ら監督獎勵の行屆かざる所あり、其極卒業生は總じて是等の點に於て他種女學校の卒業生に勝る程なる、實力を有せりと爲す可らざる丈は、吾も人も許さゞるを得ざる所なり。而して此種の女學校が陷り易き弊を指摘すれば、上述ぶる如く外國風に傾き過ぐるに

在る代りには、其獨有の長所として擧ぐ可きは、實に何れの種類の學校よりも文明風に拔んで居る點に在る是れなり。予嘗て此種女學校の主任女教師を訪ひ、女子教育問題に關し種々談らひし時、該教師より受けたる『何か我校の教育方針に關し、御忠告を賜はる可きとも有らば、無御遠慮仰せ被下度し』との尋に應じ、陳述せし所のものあり、其要を摘めば畧々左の如し。

小生は女子教育の專門家に非れば、貴校教育の方針を審査して其缺點を見出し、御忠告申上る程の能力を有せざれども、十年以來貴校に出入して教育の方針を觀察し、素人心にも御賛成申居る點三四ヶ條あれは、其を開陳して愈其方面に御盡力あらんとを御勸申度思ふなり。

（第一）基督教主義教育　前年に於ては左るとも無かりしが、近頃は基督教主義の看板必ずしも悉く當てにならず、世間よりは依然として耶蘇學校と視られ居ながら、其實基督教に儒教を折衷したる如き德育を施す男女學校も少しとせず。是れ小生の大に取らざる所なり、小生は自身基督教徒たるを世に告白せし以上、何所迄も純然たる斯教の主義に由て立たんと期するが故に、同一の告白を爲せる學校に向つても、亦其主義の確乎たらんとを望むなり、成程今日は基督教思想界錯亂の際にて、教徒の間に教理上の異論など無きに非ざるも、相互に意見を異にするは究極『基督教とは何ぞや』、之を神學的に云へば『斯教の要素（エッセンス）は何々より成立つや』と云ふ問題の上に在りて、此問題に關しては貴下と小生と或は所見の合せざるもの有るやも知る可らざれども、苟も己が認めて以て基督教と爲す所のものは、一點一畫も枉けず主張すべきは凡そ教徒たる者の當務に之れ有るべし。學校の方針に於けるも亦然り、若し此儀實行出來難しとならば、何よりも先づ基督教主義の看板を撤し去り、小生が知人なる一二教育家が爲せる如くに、學校と凡ての宗教との無關係を世に告白するを要す、旗色を曖昧にして基督教徒の歡心も失はず、教外人士の意も迎へんとする類は、小生の擯斥する所なり。然るに貴校は十年一日の如く、同一の主義を保持して毫末も其方針を改められず、是れ小生の大に感佩する所なり、左しもに一時高かりし保守の波も、貴校の構內丈へは打込まざりしもの、豈周ぐれる煉瓦塀の高きが爲めならんや、小生は主として貴下の堅忍不拔なる精神に歸せざるを得ず、若し腹藏無く小生の希望を吐露するを許し給はゞ、今少し基督教の解釋を廣濶（ブロード）にせられては如何と思はるゝ所無きに非れども、此は關係廣き問題なれば一朝一夕に決せらる可きに非ず、唯貴下が自ら認めて基督教主義と爲す所のものは、一歩も枉げられざる剛毅の精神に至ては、小生の感嘆止まざる所にして、貴校に學べる凡ての女生に充分此精神を吹込み貰ひ度く願ふ所なり。

（第二）米國的教育　日本的の呼聲高き今日に於て米國的と叫ぶは異樣の聞えも爲さんかなれども、小生は今日に於ても依然たる米國の感嘆者なり、米國社會の下層に存する（日本にも存せざる程なる）弊害、南部若くは西部の諸州に行はるゝ惡風醜俗は、小生の充分觀察して心竊かに輕蔑の念を抱き居る所なれども、然かも米國の米國たる新英州の社會が小生に與へたる好感（グードイムプレション）に至ては、終生拭ひ去り難きものあるなり、小生は一個の基督教徒として我邦の教化を望む者なるが、此四五年來自製して唱へ居る一のモットーあり、曰く『日本を米國化するとなり』と、米國化するとは、或る程度迄取りも直さす、之を基督教化するとなり、小生は今の世界に於て最も理想に近き社會は新英州なりと思考せり。顧つて我邦基督教主義學校の歷史を觀察するに、其始に於ては何れの學校の教育も皆米國的なりき、（獨り之に止まらず官公立學校の教育も其始は米國的なりき）、然るに星移り物換り、獨逸風に吹かれ保守波に流され、今日に於て最初の方針を保持する學校とては、其數指を屈するに過ぎずなりぬ。是れ實に小生等の失望する所、而して貴校が此點に於て松柏の操を失はざるを見ては、竊かに嘆美の念無くんば非るなり。小生は貴下に望む、貴校より新英州貴女（ニューイングランドレディース）の典型を備へたる婦人を鑿出せしめ、小生等の望を滿たし、我邦社會の缺點を補ふべく、乍此上勉め給はんとを、日本婦人の主導者（リーダー）たるべき者は到底新英州的婦人ならざる可らず。

（第三）高等教育　他の基督教主義女學校の多數は、低く〳〵と其科程を改むる中に、貴校は獨り反對の方針を取り高く〳〵と改め來られたる見識は、乍失禮凡ならずと小生の認定する所なり。女子を藝娼妓と爲し男子の玩弄に供するとが惡しきならは、女子教育の方針を社會時々の風潮、之を精細に云へば男子時々の變り心に從ひ、朝變暮改するとも亦惡しき譯なり。然るに堂々たる女子教育家往々にして、女子の權利を保護するとは第二に措き、只管社會の風潮に阿從するの色あるは、歎かはしき次第と云はざる可らず。議論はサテ措き我邦今

後の社會には高等の教育を受けたる婦人の需用有らざるか、内地雜居の行はれん日に於ては、獨り我政事家實業家のみ外人と拮抗し得ば、其れにて足れりや、交際場裡の機を我に收むるの伎倆は果して何人に由りて振はるべしと爲すか、更に又女子教育の世界に於て、今日の外國女教師諸氏に代り女生教育の任に當らん者は誰なるべき、如何に我邦現時の家庭が不具なれば迚、其に適合せしむるをのみ標準として女學校の科程を定められては、家庭以外の日本社會は眞に迷惑せざるを得ず、且つや現今の家庭たりとも悉くは不具に非ず、進歩せる婚姻の理想を有する男子が、自己高等教育を受けたる身を以て妻を娶らんとするに當り、女性の中、高等の教育を受けたる候補者其人無く、偶娶れば我思想を解し我經綸に同情を表すること能はざる如き、智力上の懸隔甚しき妻ならんには、其不幸如何にあるべき、家庭てふ立場より論ずるも高等女子教育は決して疎かにす可らざるなり。小生は貴校が愈今日までの方針を確守せられんことを望む。

(第四) 英語教育。上みの高等教育と其消長を同うせるは英語教育なり、頃日多數の基督教主義女學校を卒業せる女子中には、最早普通の英書は何でも讀み其意義を解し得る程の、實力を有する者無きが如し、是れ豈世界的日本の社會に生ずべきの現象ならんや、前條我交際場の將來を思ふ時は、我婦人に佛語の知識の必要なるを感ずる事なれども、英語の知識有つての上の佛語なり、男女に限らず先づ世界的日本人民たる資格を養ひ、然る後に方面的立場の役者たる資格を養ふは、蓋し當然の順序なるべしと思はる。小生は已往十年間に於て、貴校和漢文學の著しき進歩を認むるも、然かも同時に英學の退歩を認めざるは、滿足に堪へざる所なり、願くは今後も益々同一の方角に進み、正則英學を以て永久に校の一長所と爲す方針を改められざらん事を。

所謂宣教師派女學校なる者の長所を精密に觀察すれば、斯くの如き結果を得る次第なれども、以上は畢竟其上乘なるものにのみ當て嵌まるべき評にして、讀者若し凡ての宣教師派女學校は何れも此讚辭に値ひする如く思はゞ、大なる誤謬なり、適當の主任者を有し光彩ある歴史を有し標本たる卒業生を有して、予をして以上の言を爲すに躊躇せざらしむる學校は、僅々のみ、其甚しき不完全なるものに至ては、女生をして祈禱文を唱ふることゝ讚美歌を歌ふこととを覺えしむれば、其にて基督主義教育を施し了れりと思惟する如く見ゆるもあり、又主任者たる女教師は、米國の南部若くは西部田舍の百姓の娘か何からしく、徒らに宗教的迷信の强きのみ、教育も無ければ品格も無く、我女性の師表となりて米國的高等教育を施すが如き、思ひも由らぬ人物もあり、何れより見るも我邦教育社會の厄介物としか、考へられざる學校も無きに非るなり。

然れど茲に一つ、凡そ宣教師派女學校を通じて存する長所あることは、吾人の看過す可らざる所にして、予は今ま一方に之を指し、他方に現今我邦教育界の一缺點と思惟する者を擧げ、聊か平常心に蓄積する所を陳じて、讀者の參考に供せんと欲す。」

凡そ宣教師派女學校を通じて存する一長所とは他無し、英語の知識是れなり、若し夫れ讀書上の實力に至ては、所謂高等教育と密接の關係あれば一概に云ひ難けれども、兎に角比較的語音正しき一點に於ては、官公立學校を括るめ天下何れの學校が此派の女學校に企て及ぶべき、鸚鵡にもせよ猿にもせよ、正しきは矢張正しきなり、是れ蓋し女性は男性よりも語學の天才勝ぐるゝ所へ、旦夕外國女教師と寢食を共にして英語を話す機會を有する、天下此派女學校の生徒に優る者無きの致す所なるか。今ま予が此宣教師女學校の一長所に對し、現今我邦教育界の一缺點として指摘せんと欲するものは、高等小學に於ける英語教育の不完全是れなり、近年に至り學制改正せられ其科程中に英語の加へられたるは宜しけれども、其教育甚だ不完全にして初學の徒に附與するに忌むべき語學上の弊を以てする傾向あるは、識者の痛心に堪へざる所なり、人は曰ふ「高等小學」と、左れど人間の身上に終生磨し去る可らざる習慣の銘せらるゝ、未だ高等小學齡の時代より甚しきは無し、就中語學上の習慣の如き此時代に於て一度銘せられたるものは、幾年經過するも全く改まり難きは、現今我社會の立役者たる齡三十乃至四十の間に在る士が、英書は一通り讀み得るも英語の力に至ては甚だ不充分なる一事に徵し明かなり、彼等は其初學の時代に受けたる變則教育の爲めに、滿生殃せられ居るなり高等小學の英語教育豈輕視す可けんや。

今の高等小學に於ける英語教育の不完全なる、其重なる原因を質せば適當の語學教師其人を欠くに在り、尋常師範學校にて他の學科の傍ら英學を修めたる位の教員に、之が教授の一任せられある結果は、誤たる語音を敎へ實際の會話に適せざる知識を注入するの避く可らざるものあるなり、左れば今日の急務は英語丈けは專門の教師をして敎へしむるの組織を立つるに在り、然るに英語教育中にても至

雖の部に屬する、初學教育の任に堪へ得る程なる專門家は、其數甚だ多からず、之を聘せんには少くとも月數十圓の報酬を要し、高等小學の經費にては力及ばざる所あり。予は此缺點を補ふ爲めに、宣教師派女學校の卒業生を推薦し度く思ふ者なり、今日尋常師範學校の女子部卒業生が、男教員と相並んで尋常小學授業の任に當り居るを思ふ時は、宣教師派女學校の卒業生が語學教師として、男教員と相並ひ高等小學の教授に從事せんは、毫も不釣合なる現象に非るへし、經費の點より云ふも、報酬月額高等師範學校女子部卒業生に拂ふもの位を拂へば可なるが故に、校長以下他教員との權衡も保たれて都合好し、而して其成迹に至ては名も知れざる男英學者を、單に洋行の履歷等あるが爲め傭聘して教授を托するより、遙か優れるもの有るべきや予の保證を辭せざる所なり。海外の宗教家が多額の金錢を投し女教師を送り女學校を設けて、盛んに教育を施せる結果の中、苟も取るべきものあらば之を利用して我教育界の缺點を補はんに、何の不可か之れあらんや、耶蘇の二字に避易して折角收め得べき利益をも收め得ざる如き教育家は、開國進取を以て國是と爲す邦家に不似合なる教育家なりと云はさる可らず、予は我教育の當局者に斯る誤無からんことを望む者なり。

基督教主義女學校の種類を揭け、各自の特質を指摘し、更に又長々しく宣教師派女學校の長所を叙しながら、今ま僅かに英語教育と高等小學の關係を論じて玆に筆を止むるは、聊か龍頭蛇尾の嫌無きに非れども、他の諸點と現今教育の方針等を對照論議せんと欲せは、問題の範圍廣且大に涉り、到底此篇に悉され可くも非るを知るが故に、一先つ玆に收結し置き機會を他日に待たんと欲するなり。

女子と文學の主義

三輪田眞佐子

女子教育の盛なるにつれて、女子は如何なる天命を享け、如何なる人分を盡すべきかと言ふけぢめ、稍明になりぬ。わきて文學は女子にも適するものなりとは、殆ど社會の輿論なるめり。思ふにわが國は、寛和以後、鎌倉時代のころ、才媛輩出して、あるは紀事をものし、あるは烟霞を賦し、今なほわが文學の骨髓として、數へらるゝもの多ければ、女子はその性文學に堪能なりと、言ふも疑ふものなきこそ幸なれ。元來ましら鳴く深山に入りて、丁々と木を伐り、あるは朧月夜に鉾とりて、敵陣を突くなど、總て筋骨を碎く人事は、女子の長所にあらじ　さりとて一切辛苦の勞を、男子にのみ讓りその膏血を吸ひて、無爲に生存するは本意なきを以て、感情に富む天性を利用して、男子に報いざるへからず。思ふにこの感情こそ、文學と少からざる關係あれば、女子の文學を事とするは、自らなる必要に應するものならんかし。されぱにや、近來女子もあるは文に、あるは歌につきて、稍つとむるあり。されどこは歡ぶべきか、將た悲むべきか、若し文學を以て、單に快樂のためとせんか、あはれこれなん亡國の萌なるめり。勿論人類には、快樂は缺くべからざるなれど、ひたすら快樂のみを主とせんには、忽ち風俗遊怠に馳せ、人情放蕩に流るゝは勢なり。昔郁々として盛りし、周の

衰へしも、文のみを尊び、遊逸に傾きし結果なりけむ。亦印度の如きも、その宗教及び文學の上に於ては著しき國なれど、あはれむべきは、その建國以來、國家としての躰面は、殆となかりしとかや、猶西史にも優美を極め、文弱の弊に陷りて、滅亡せし國の例多かりき。蓋し前車の覆るは、後車の戒とかや、今や文學を以て、單に文明の花なりなど、虛聲に醉ひて、異日の利害得失を考へざるときは、あはれわが二千有餘年、動きなき瑞穗の國も危き哉。

さりとて文學を以て、徒ら妄想を描き、私怨私情を巧ましうせんためのものと限らんか、いみじう卑しきわざなるのみかは、害さへ起るならん。さなくとも文學を以て、單に筆硯を弄する嬉樂と考へ、主義もなく、見識もなく、唯世の濁流に誘はれて、小說とか、日記とか、あるは三十あまり一字のみを、綴るを以て、その能事終れりとするものあらば、遂に人を謬り、世を欺き、以て民心を狂亂せしむる有害の器となり果てん。されば文學なるものあらずもがな。

殊に恐るべく忌むべきは、厭世的の觀念を吐露するばかりを以て文學の本領と限るにこそあれ。思ふに宇內を觀念し、人生を顧慮して、樂天的の思想を起し、將た厭世的の觀念を起すは、人の自由ならんも、たとひ人生を厭世的に觀念せんも、如何せん身既に浮世に宿る以上は唯宜しきに處するこそ、人の道なれ。おのれは人生に淚の必要なること、さながら水火なる元素の、缺くべからざる如きを信せり。わきて慈悲の淚、惻隱の淚などは、人生恩愛の源なりとこそ言ふべけれ。これに反して失望の淚、怨恨の淚などは、人生を墮落せしむるものならんかし。されど厭世的の觀念を脫却することは難し、唯厭ふべき世を救ひて、樂しき世に化する覺悟を懷くこそ良けれ。苟もこの覺悟なからんか、個人の幸福、家族の團欒を作る能はさるのみかは、邦家の弱點となるべし。まことや女子は天性情に長け、淚に富むものを、剩へ失望及び怨恨の思想を養はしめんには、勢ひ良人に對する勤、兒童を育つる勞を以て、悉く果なき人生の煩累と思ふに至らん。故におのれは女子の文學界に、樂天的の思想を樹立すると同時に、厭世的の思想をも、救世的の効あらしむる、見識を定むるこそ良けれと思ふなり。

こゝを以ておのれは、女子のため、將た邦家のため慮るに、今

後女子の採るべき、文學の主義は第一天然の至妙を會得し、ことを文章あるは詩歌となして、人生に紹介するを以て、目的となすべし。そも〳〵天然は善なり、美なり、且つ眞にして永遠なり。故に苟も天然を悟らんものは、忽ち浩然の氣沛乎として起り、おのづから心廣く軆胖なれは、樂しみて業を勵み、歡びて人を益し、その感化の及ぶところ、風俗及ひ人情を善良に誘くに足らん。第二勸善懲惡を以て目的となすべし。若し社會を亂し人情を害ふべきものならんには、その文如何ばかり流暢ならんも、その句如何ばかり美麗ならんも、單に文字とは言ひ得んも、決して文學とは名くへからず。されば以上二つのものは文學の眞髓にこそ。

果して文學を以て、かゝる目的のものとせんか。ことを事とする女子たち、決して文字の末技を知るを以て安すへきかは。將に天然の秘義を探り、造化と氣脈を通し、以て天地の秘理を未た知らざるものに敎ふる、尊きものたることを知らさるへからず。莊子曰く以二造化一爲二大冶一惡乎往而不可哉と。されば文學を修むる女子は、身はよく、神聖の境界に逍遙するものなれば、父母に對して、良人に向ひては自道を敎へて、婢僕を御して、あるは世人と交りて、言ふところ、行ふところ必ず自然の法に違はさるべし。あはれ文學の女子に及ぼす德は、至大至宏とこそ言ふべけれ。獨り撰ふへきはその主義になん。

東京乞食の總頭領は
多情多恨の一婦人

非人乞食としいへば、人間社會中の尤も憐むべき、最下等の境遇に生息し、身に穢れを着け、毒を含み、人の愍みに生活し、罪惡を以て社會に毒を流すと夥しく、如何にして之を救濟驅除すべきかとは、苟も社會改良に志あるものゝ、齊く憂慮する處なり。さる醜類の頭領とも仰がるものは、那計の獰惡醜穢の徒なるべきかと思はるゝに、東京市内乞食の崇めて大親分となすものは、豈に圖らんや、これ多情多恨の一婦人にてあらんとは。また彼女は、社會改良家の未だ着手せざるに先だちて、配下の乞食を善導せんが爲めに肝膽を碎きつゝありとは。今時事新報の報ずる所によりて、彼女が經歷を見るに左の如し。

東京乞食の頭領として穢れを釐け、毒を含める醜類の尊敬を一身に聚め、威信を暗黒の世界に弄する者は地獄の閻魔にもあらずして、思ひの外に情けある骨柔かき婦人なりけり。仲間には婆で通れど、本名を柳カノと呼て素と江戸の生れなり。七歳の時より淺草大音寺前に住せし、家根木某の家に養はれけるが、年十五にして養父母に死別れ、寄るべなき身となりて、盛の花を嵐に晒らし、十九の歳恰かも開港となりつる横濱に出でゝ、誘ふ水のまに〳〵漂よひ、遂に遠州生れの白柳勘四郎とて、其頃土方となりて、東海道程ヶ谷に居たる者に逢ひ、共に遠州なる勘四郎が里に赴きけるに、其處に妻もあり、子もあるを見て、始めて男に欺かれたるを知り、緣を絶ちて此度は勘四郎の仲間なりける、名倉半十といへるものを語らひ、夫婦の誓ひして横濱に歸り、いと樂しく世を送りけるに、幾もなく半十眼の病に罹りて、假初ならず打惱みしかば、今は生活の道も空になりて、カノは看護に帶をも解かず、病いよ〳〵重り行きて、貧はいよ〳〵身に迫まり、藥にすべき代とへに盡き果てければ、東京に來たりて幸なき人の玆に泣き寄る、芝新網町に詫住ひの朝夕、糊口の稼ぎ看病の忠實〳〵しさに、折々は合壁の人の淚の語り草となりぬ。尙ほ其甲斐なかりければ、此上はとて半十の手を引きつゝ、甲州身延山に立籠りて、精進潔齋して、身に代へて、夫の平癒を禱りしかど、露ばかりの効だになし。半十いと氣の毒に思ひて、吾は一先づ故鄕に身を寄すべし、卿は今を盛りの身なるに、埋れ木に世を果てさするが哀れぞとて、カノの否むを强ひ、遂に別れ〳〵となりたるは、頓てカノが廿三の秋とぞ聞こえし。時は明治五年にして、恰も戶籍改正の事あり。カノが養家は已に斷絶して、久しうなりければ、カノは身延山より新網町に歸りて、其處の十四番地に、戶籍編入を願ひ出でけるに、筆者の誤りにやあらん。カノが姓家根木をば、頓て柳とぞ書きたりける。斯くて後カノは處定めず漂よひて、此間にありとあらゆる業を仕盡くし、有りと有らゆる境遇を經盡くし、有りとあらゆる艱楚を嘗め盡くしぬ。カノが言に曰はく「泥棒の外は何でも致しました」と。遂に淺草區新谷町に足を駐て紙屑籠を背負ひ、遍れく市中を徘徊しけるに、日本橋伊勢町邊の者に愛顧を受くることゝなりて、日毎に此處に通ふ程に、其處らに漂ひたる乞食小僧の、何時とはなしに婆や〳〵と馴づき寄り、便り來るもの日每に其數を增しければ、何かと肝煎りて、小僧等が持ち寄れる紙屑をば一纏となし、其道の者に賣却ふ果は紙屑拾ろひの立場として、數名の子分を養ひけるに、生長するに隨がひて、或は或場所の親分となるものあり、或は魚河岸に魚腸を拾ふもあり。斯くてぞ今日に及べるなれば、親分の又親分として、大親分と立てられ、婆やと馴つかるゝも實に理りなるべし。婆やは今四十七歲、下谷區萬年町二丁目五番地なる五軒長屋を一手に借受け、子分子方を數多く住ましめて、相應の暮向きは、他所に知られぬ全盛とやいふべき。

「泥坊の外は何でもしました」と生れ來たりて四十七年、社會の下層を經廻りて、酸いも甘いも嚙分けたるは此婆やなるべく、左れど素より惡の徒にあらず。嘗つて吾世話したる小僧とものゝ、日に惡業に進むを見て、幾度びか嗟息し、所謂譜代の親分に命じて、吾配下の小僧をば、嚴密に取締らしめ、違ふ者あれば苛責して毫しも假さず。又已れ乞食の大親分、或ひは紙屑拾ひの大親分などゝ、人に呼ばるゝを耻ること深かく、何事にもあれ他に正業を求めて、配下の小僧等を使役し、一簾の營みをなさばやと發心し、遂に或方より資本を借り受け麥藁眞田工場を打建つるの計畫、をさ〳〵怠らずといふいと嘉すべし。

蓄妾聘妓の害

福澤先生が、自ら守操の主義は、物の眞理に基けるものなるや否やは、しばらく措く。其議論に至りては、眞理を談ずるよりは、寧ろ權宜を說くを以て其本領とし、かくして凡人を敎へんとすといはぬ計りの口氣あり。其『福翁百話』の如きは、よく之が實證を示す。近時の時事新報の社說に『文明世界に國風の獨立を許さず』と論ずるもの、假令筆者は餘人にてあらんにも、論旨實に福翁の本領を明言するものに非ずや。其論中に曰く

我國にて本妻の外に妾を置くは、古來の習慣に怪しまざる所なれども、彼國人の眼より見れば恰も公然一夫多妻の實を行ふものにして驚かざるを得ず。況して紳士の流が公會の席に藝妓と名くる一種の賣婬婦を聘するが如きは、

彼國の風習にて云へば、社會の暗黒底に擯斥して苟めにも士人の口に上ぼす可らざる醜物を、衆人稠坐の中に延て、公に之を弄ぶものなり奇怪に非ずして何ぞや、實際に是種の事實を存する以上は、彼の國人等の見る所にて、日本人は公然不德を行ふの人種なりと認められて、兎に角に辯解の辭はある可らず。不德云々尙ほ或は忍ぶ可しと雖も、之が爲めに間接に日本の國光に影響する其不利は決して看過するを得ず、我輩は今の人間社會に表裡を透して、玲瓏玉の如き潔白を望むものに非ず、只その裡面の醜を裹んで外に現はさず、表面は飽くまでも清潔にして、體裁を美にすることこそ、文明世界に處する日本人の心掛なりとして、之を大切に思ふ者なり。

と。耶蘇教國にては男女の關係潔白なりといふも、其表面の事にして、裏面には醜穢を極むるとあり。然れども此醜穢を公にすることを耻ぢ、また之を惡む。我邦國風たとひ蓄妾聘妓を禁せずと雖も、此醜事を公けになしつゝありては、文明社會に同等の肩を並ぶる能はざる故、之を蔽ひ隱すべしとはいふなり。此類の權宜論といへども、之を以て凡機を濟度するを得ば實に幸なり。

教　育

學校生涯の快樂

頃日三田塾出身の諸老先輩等相會し、互に學窓囓豆の往年を追懷して、轉た今昔の感に堪へざるもの多きに、己が霜髪、禿顱も忘られて、うら若かりし昔に歸るの思ひに樂しみたりと聞く、實にやさもありなん。夫れ人、世に處するの間、終に永く忘るべからざる、少壯時代の二經過あり。即ち子女となりては、父母の膝下に團欒するの夕と、學生となりては、校舍の窓前に、智德を研究するの旦と、この二者は、是ぞ人生經過すべきの大事件にして、此等は人品陶鑄の大根底なるが故に、そが與へつる感化は、深く胸底に浸染して、世を畢ふるまでも忘られず、而も其昔を回想するの時には、現在の富顯はた窮陋いつれなるも、共に暫時之を忘れつゝ、心慰み、氣若やぎ、或は非德は之を慚愧せしめ、老成の德といへども、なほ此際尠からざる薰化を蒙るのためし、蓋し多からざるに非ず。

人の子女として父母の家に在るの間、彼等の品質を薰陶するの力、尤も大なるものは、父母の嚴戒慈訓素より其者なりと雖も、亦團爐團欒の無邪氣なる嬉遊や、頗る愚かしきに似て、其實、効の著大なるものなくんばあらず。父母其子の爲めに馬となりて、這ひまはり、子と共に獨樂を打ち、笛を吹き、カルタを遊ぶなんど、同情を彼等に寄せて其樂みを助くるその其子が品質の淡然無邪氣なるを致さしむるの力、蓋しまた之に過ぎたるはなけん。之と等しく、人、學生となりて、校

舎に出入して、學業を受くるの際、智德共に之を教師の薫育教訓によりて琢磨すること、學校に入るの本意なりと雖も、亦學生をして、自らには其品格を養成し、他にありては、愛校心を盛んにせしめ、其効果の永く、彼が後年の心情に繫留して堙滅せざるもの、學校生涯中に於ける、無意の遊戯快樂の中に存在すること甚だ大なるものあるなり。

予輩昔在校の曩時を回顧するの時、某教師の講義、某先生の訓話の頗る予輩を稗益したることを、今猶は記して忘れざるもののあるべし。然れども、吾人をして彼在學の日を追想せしむるの便りとなるもの丶尤も多くは、彼に非ずして、寧ろ諸學友と共に時にはまた教師の人々をも合せて、運動散策若くは會談遊戯せしことの往事なりとす。而も之を追憶するの際には、徒事に過ざりし如き此等の、大に予輩の品性を感化したることを感謝せずんはやまざるなり。世に出で丶轗軻迍邅に處するに當りて、家庭遊樂の昔の慕はしきと共に、また彼過ぎし日の學校生涯の快樂のなつかはしさに堪へざるもの、豈に獨り予輩のみならんや。此情のやみ難きものあればこそ、學校にて受けたる、凡ての德化教訓は、永く學生後年の心念中によく活動するなる事、何ぞ家庭團欒の快樂の忘れ難きによりて、家庭教育の功力人の老年にも及ぶに異ならんや。』

家庭團欒の快樂の增進せしめざるべからざるは、既に論辯を俟たずして明かなるが如くに、學生の爲めには第二の家庭ともいひつべき學校生涯に於て、學業以外より得らるべき快樂を增進すべきこと、具眼者の等しく承認すべき所たり。さらば如何にしてか能く之を增進せしむべきや、其方法を案出すれば、樣々多かるべきも、第一の要とする所は、學生交互の友誼を親密ならしめんが爲めに、彼等に多くの團結の機を得せしむるに在り。文學會、茶話會、運動會の如き會合を奬勵して、一方には、彼等の智德を研磨せしむると共に、他方に於ては、同樂共遊の折を有せしむるも可なり。また新年會、文學大會、運動大會、忘年會などの歡樂娛遊を以て、學生が快樂を盡くすの時たらしむるもよし。少しの刺戟を用ゐなば、學生等は此種の會合に團結すべければ、教師は奬勵者の地位に立ち、また監督者となすに、彼等學生の遊戯の其度に過ぎざらしめ、且つ時には教師自らも彼等に伍して嬉樂を共にすべし。父母其子と遊戯を共にしては、己にも亦小兒の態度を

取るが如くに、爰に教師もまた講堂に出づるときの嚴めしき面貌を脱して、全く學生の遊び仲間となる事は、また彼等をして、教師の同情に、一層の快樂を得せしむる所以なり。父母のたゞに嚴峻なるは、子女を養ふの道に非ず、よろしくまた寛容なるものあるべし。教師のたゞに嚴峻なるは學生を教ふるの法に非ず、またよく寛容に、學業に於て彼等を督勵すると共に、遊戯に於ては、また之に同情を寄せて、其樂しみを股つヿあるべし。如斯くするは、よく學生を教育するものの策と謂ふべし。

また彼の寄宿舍は、學生が家庭を辭して後の家庭なれば、之をして多くの快樂と慰娯とを得せしむるの途を備へんが為めに教育家は爰に大に考慮する所なくんばあらず。寄宿舍の生涯其樂み盡くるヿなきに至らば、學生は勢ひ皆彼德育上頗る不健全なる下宿屋を去りて、爰に入り來り、取締上頗る便益を受けん。快樂多き家庭、遊蕩の子を出さずとせば、快樂多き寄宿舍また遊蕩の學生を出すに免れんか。學生が學校生涯中、學業以外よりして受くる快樂の、よく擇んで純潔無邪氣なるに處らば、彼等が精神教育上、著大の効能を奏すべき事は、予輩の信じて疑はざる處にして、少しの實驗は直に是が實を證せんとす。學藝の教育と、學校生涯の快樂と相待つありて後、學校の教育は其宜しきを得べし。器械の完備を計り、博學の教員を雇用せんヿは、學校の一日も忽にすべからざる所なりと雖も、また種々なる方法によりて、學生が純潔なる遊樂を幇助奬勵し、彼等をして、學校生涯の快樂を感ぜしむるヿも多からんヿは、教育者たるもの、輕視すべからざるものなり。然るに今の教育家頗る此事を看過するが如きヿなきか、何ぞそれ諸學校殊に官立諸學校に於て、學生が受くる學校生涯の快樂の、甚だ少量なるが如きを見るぞや。當代の教育家は、あまりに學說論理に流れて、形式の範圍內に在りて、智德體の三育を、首尾能く濟ませんとしつゝ、しかして、學生のなすがまゝに任せたる、學校生涯の快樂の如きを微なりして、重顧を拂はざるが為めに、却て教育上の不成功のアリ〳〵と後に殘されつゝあるを曉らざるが如きは何が故ぞや。團欒の快樂を欠かんには、家庭の教育、子女の腦裡に沁み込み難きと等しく、學校生涯の快樂薄からんには、教育の効化學生の上に普及するの勢力、また從つて

薄し。されば學生が享くべき學校生涯の快樂なるものは、即ち、學堂の教訓薫陶をして、眞に效果あらしむるの所以ならずんばあらず。予輩の之に重きを置くの理正に玆に有り。學校生涯の學生に與ふるに、純潔なる快樂の津々として盡きざるものを以てせんには、たゞに其精神を薫化するのみならず、また愛校の念を熾ならしむべし。蓋し學生が愛校心の由來する處、たゞ玆に在り、曾て他より來らず。而もまた校を去り、世に出で丶後も、時に當り、事に觸れて、此快樂の日の忘られ難きまゝに、其學校にて享けにし、恩育德化從つて、精神中に活動して、其效力遂に滅びざるべし。學校教育なるものの、其效化を及ぼすと、よく如斯き處にまで至らずんば、其力猶ほ未だ厚からずといふべし。

學生風儀の衰頽乎
教師風儀の衰頽乎

學生の風儀の衰頽を嘆ずるの聲、やうやく此頃になりて、教育社會に高まるに至りたり。曩に陸奥伯が人に語りて、大學々生の狀態を痛罵して、其意氣地なき俗吏根性を嘲笑し、濱尾大學總長の之が爲めに辨ずるや、二三教育雜誌の却て陸奥伯に和するの説あり。『教育報知』は帝國大學、高等學校の弊事を擧げて曰く、

醫科法科の學生中には待合に相會して賭博をなし、爲めに研學を廢する者ありと、これをして眞ならしめば、實に沙汰の限りにあらずや、今日の社會の狀態より觀察する時は、强ちこれなしと云ふべからず、夫れ帝國大學は最高の教育を施す處、これより出づるの士は、其學識品格の點に於て皆國民の燈明となり、繩規とならざるべからず、而てかゝる醜聲を傳達せしむ、少數者なりとて安然たるべきか。

第一高等學校は、由來學生の標品を以て稱せらる、其質樸なる點に於て、其無邪氣なる點に於て、其勇壯なる點に於て然り、然るに何等の反響にや、近來大に衣服を飾るの風習を釀せりとかや、既に衣服を飾るの心あり、他は推して知るべきのみ。

『教育時論』は更にいへらく、

學生の威儀は、之を王朝時代に見るへく、學生風儀の意志は、之を舊幕時代に見るべし。獨り今代に至り古代の禮法廢れて、新禮未た起らす、學生は自恣放逸にして、師長に對し、親に對し、社會朋友に對し、殆ど風儀を存する所なく、小學生徒にして、煙草を喫する者あり、未た乳臭の幼年にして、酒を飲み、女に慇懃の情を通し、或は道ならぬ交りを結ぶ者あるに至るは、教育上頗る憂ふべき事ならずや。

同誌また曰く、

彼等の脈管中には、果して志士的熱血流通しつゝあるか、彼等の眼中には、果して自己以外に國家なる發光體の映ずるや否や。勿論多數の學生中には、松陰彦九郎の輩に劣らざるの志士あるへし。徂徠白石に讓らざるの抱負を有する者あるならん。然れども全體より之か觀察を下せは、上は大學の學生より、下は寒村僻地の青年學生に至るまて、一般に志士的氣風の消沈衰微したるは、爭ふへからざる眼前の事實といふべし。

其今昔を比較すれは、現時の學生の氣風の墮落せるとの夥たしき、教育界の痛憤事なりと雖も、この墮落なるもの、豈に獨り、學生のみを責めんや。其責めは、實利主義なる社會の風潮と、社會の風儀の頹廢と、またこの社會の風儀を善導すべき、教育界の風儀の墮落せるとに起因せざらんや。『教育時論』にも自ら辯して、

現今學生の風儀の修まらざるは、獨り學生の罪に非ず、社會全體、未だ一定の禮法なく、嚴格なる制裁なきこと、之が本たらざるを得ず。現代人士の風儀に滿はざる、其沒風流なる、これ自から學生をして、滔々弊風に走らしむる實物教授とならずや。故に學生の風儀を矯正せんとせば、一方には之を教育上より見て、一定の風儀と、一定の制裁とを示すと同時に、他方には學生をして、社會の弊風を否定する底の意志を有せしむるか、若くは社會の弊風に染まざらしむる如き方便を設けざるべからず。

といへるもの、實に其理あり。然れども直接學生に接して、彼等を教育する其人士等が風儀は如何、此等人士の社會をなせる、其教育界の內情は如何、一たび之に推究し至らんには、學生風儀の衰頽豈に特り云ふべきならんや。之を云はんとせば先づ、教師風儀の衰頽をいへ、之を矯正する能はずんば、如何で學生風儀の衰頽を挽回するを得んや。學生に志士的氣風なきは實際なるべし。然れどもこれなきは、即ち彼等に志士的氣風をインスパイアするに足るの教師なきなるを知るべし。實利主義は、教育界の狀態なり、社會の狀態なり、否な教師自らの精神なり、學生豈に獨り、之に傾向するものならんや。吁學生を責めんとするものよ、まづ教師を責めよ。教育家にして、學生の風儀の廢れたるを嘆ぜんとせば、まづ自ら顧みて、自己及び同輩の風儀を問へ。惡しき種は、善き樹を生せず、惡き樹は、善き果を結ばず。冀くは其本に反れ。今の書生、教師に對する尊敬敬重の念薄く、故に師道の教育振はずと嘆ずるもの多し。然るにこはこれ教師自ら師道に處らず、よりて學生の尊敬々重を値ひすべきものなきが故ならずや。自ら安んじて其道に處る、誰かよく之を犯さんや。師道の教育の衰へたるは、教師の師道を知るものなきに起因す。然るに教師は却て學生の不埒不心得に罪を塗らんとす、誤れるもまた甚しきかな。國治まらざれば之を臣下の罪に歸するは、壓制の暴君なり。家亂るれば、之を子弟の罪に歸するは、不倫の頑父なり。學生の風儀正しからざれば、之を彼等の罪に歸するは、非道の暴師なり。大人君子は然らず、事々に自ら三省す。今の教師、日に三省するとあらば、學生の風儀の衰頽、豈に挽回するに難からんや。而も之を挽回せんとも、彼が三省にあるのみといはんも不可なきをや。

下宿屋

吾人か本誌前々號に於て、『寄宿舍教育』を論じたると殆と同時に、『教育報知』記者は、渡邊洪基、辻新次氏等の新設にかゝれる、學資保管會社に對つて、學生界の腐敗を洗滌するの方策として、會社は須く百以上の學生を入るべき寄宿舍を都下の各處に起すべし、又た之が亘監督者を擇ぶべし。荀も之にして成るなくんば彼會社の精神や斷じて徹せざるなり。ゑかもまた彼も一己の利己團躰と認めらるべしと論ぜり。論旨は、吾人のものと、其方面を異にすと雖も、また吾人が志を得たり。該記者は國民の富力增進せずして、學資の年々に增額し、而も東京市內學生の要する學資の多分は下宿料にありて、この下宿料は漸々暴騰し、また彼の下宿屋は此際に奸策を行ふ事、學生界の前途に向つて憂ふべきものゝ一なり。されば此弊害を矯めんか爲めに、學校公認下宿屋を設けて、學生の下宿を束縛し、かつ下宿料上下の權を學校の手裏に移すことに決せしむべしと說きて、爰また學資保管會社に勸告するに至りたるなり。吾人も亦記者と共に該會社にむかつて特に此一事を勸めざるを得ず。

ベースボール

ベースボール遊戲の日本人間に行はるゝに至りしは、明治十六七年の交に、鐵道局の吏員等の間に行はれしを始めとして、府下二三のミッショシ、スクールに傳はり、明治學院の學生は同技に巧妙なるを以て、其名稱せられき。次で農科大學に傳はり・第一高等中學に傳はり、また府下二三の尋常中學にも行はるゝに至り、今は第一高等學校實に其覇權を掌握するに至りぬ。たゞに府下のみならず、地方の高等學校、私立學校、尋常中學等にも流行するに至り、京都同志社の如きは之を以て一時關西に雄視したりき。然るに今年第一高等學校の同技撰手等が、橫濱の外人等に再三角技ゑて、勝負交々なりしや、ベースボール熱一時に高まり、是まで知らぬ顏なりし新聞紙雜誌にも之を唱傳するとなりては、各地尋常中學の學生等競ふて之を弄ぶに至りたりといふ。吾人は實驗上同技は、フートボール(米國南部の大學にては、フートボールを危險なりとして之を禁じたりといふ)の如くに危險ならず、四肢全體を運動せしめ、かつは學生間の團結を親密な

らしむるの便りともなるべきを以て、盛に其流行せんことを欲するものなり。或教育雜誌記者の如きは、ベースボールをなして、手を挫きたるものあれば危險なり、寧ろ之を廢して學生には日本的の擊劍をなさしむべしなど論じたれども、左樣にいへば、擊劍は頭腦を打ちいたむるが故に更に危險なりと反論もせらるべく、且つや躰育會議にて躰育上之を不可としたりといふも、强ち無理には非らざるなや。况んやベースボールの如きものは、其手を挫くなどいふとは、極めて稀れなるものなるをや。吾人は信ず、ベースボールは今後盛んに我國學校に行はれ、終に是れがナショナル、ゲームとなるに至らんと。而もベースボールの盛んに學生間に行はるゝに至らば、其効果の、柔軟兵式の體操などよりも躰育遙か上に裨益多かるべきなり。男子學校には遊戲として、ベースボールを奬勵せんと欲すると同樣に、吾人はまた女子學校に向つてローンテニスの遊戲の行はれんとを勸めんとす。

教育論者の筆鋒謹嚴ならず

當今筆を執りて、教育界に立つの人にして、筆鋒に謹嚴ならざるものゝ何んすれぞ去かく、多きなるぞや。

苟も反論駁議すべきものあらんか、宜しく、正大堂々の筆鋒を揮つて、侃々諤々毫も假すとなかるべし。然るに彼人を誹り、事を罵り、極めて輕卒の筆鋒を示すと、假初めにも、社會の先醒を以て任じ、文化風教の善導を以て任ぜる教育家の所爲ならんや。然るに未だ之を覺らざるもの多し、嘆ずべきかな。

正大公明を以て旨とすべき教育論者の間に、往々曲學阿世の筆鋒を弄ぶものあり、彼の學才を以てして、自己の眞知にはさほど頑固の思想あるべき理なしと思はるゝに、其筆に顯れ文に成るものを見るに、頑迷不覺また甚だしきものあり。彼此說を以て、其眞知に問はゞ、これ曲學阿世の爲にするものなりとの咎めを受くるとなきか。教育家にして筆に謹嚴ならず、如斯く曲學阿世するものあらば彼が天職にそむくの罪や大なりと謂ふべし。

宗教と教育

教育時論記者『宗教と教育との關係』を論ず。吾人は宗教と教育との間に大に區別する處あるべしとは信ずれども、亦彼記者の不明なるにも驚かざるを得ず。歐洲に行はるゝ宗教を以て、告朔の餘事に過ぎずといふは、事實を知らざるの言なり。宗教家の善行は、差引勘定に出でゝ、畢竟僞善なりとするは、宗教を知らずしていふの語なり。或種の宗教々義に基ける道德を以て一校の生徒を教育せんとするは、是れ其生徒に違憲の宗教を教ふるものにして、憲法の大罪人たることを思はざるべからずと論ずるは、杞人の憂に過ぎずして、火あらざるに警鐘を鳴らすものなり。記者は實に宗教學校なるものを知らず、必ずやまた之に學べる生徒に接したることなきなり。不知にして立言す、教育家の所爲に非ず。且つや漫りに憲法の大罪人なる語を用ゐて、彼を威嚇せんとするは、果して教育者の所爲か。また敢て問はん、かの空に呼はゝりて、國家の大道を唱へ、偏狹なる國家主義を以て、學生の精神を萎靡せしめんとするものは、これ果して天理人道の罪人たることなきかと。

教育會の現狀

政變以來、吾人はますく幾多教育會なるものゝ、無能力なるに痛嘆す。彼大日本教育會及國家教育社の今日の如きも遂に成らずして、各蓄蝸廬に退縮去、共に無能の裡に安息せんとせり。地方に於て教育會聯合の氣起らんとするものありと聞けども、此等も畢竟一時の夢に過ぎずんば幸なり。

米國 白痴教育通信

（大須賀亮一氏）

昨今毎日フアーナード氏の學校にて取調べ居申候當月末までは此地に滯在の積りに候右學校は最新の式に則り所謂別舍主義の組織に候之は子供を類によつて區別し一級の數を可成少くし以て一人〱に適應の教育を施さんとするの主意に有之候ものから大躰の教育法には他と相異り候處を見ず候もよく行屆居申候最下級の如き其困難の樣實に名狀すべからず隨て教師の辛勞一方ならずよりて課

業の後卒倒せんばかりに相疲れ候を見ることもありされど其結果の著しきは順を追ふて最下級より最上級までを巡覽し彼此相對照致候時に相わかり申候最初一年間は其結果餘り著しく相見え不申候由經驗家の語る處に候

白痴の原因に付ては色々之有候も中には幼時腦膜炎を煩らひ候に起因するもの甚だ多く候がかゝる子供は課業中時として再發致候こともこれ有候故疲憊の準備まで致しある教場有之候昨日も一人の子供七分間強く痙攣を起し候

小生は白痴教育實地の樣を見てフレーベルが幼兒を教育する場合に際してこれが自然の子人の子神の子の三位一躰なることを忘るべからずと警告せしことの愈々以て卓見なることを感じ申候小兒を教育するに大人の行儀作法を以てするが如き其發育を毀損する少小にあらず而して人間中の最劣等のものたる白痴を教育するの場合に於て更に然るを覺え申候

視、聽、臭、味、觸の諸覺皆不完全に候而して中に最も器關を毀損されたるも有之候も大概は精神發育の不完全なるに起因致候故にこれにはそれ〳〵の教育を施し居候

歩行皆な不充分に候而して其原因も重に右同樣に候

言語も同樣に候中には舌根痲痺して動かざるも有之候もかかるものは極めて稀に候

『愛は法を全ふす愛は恐を除く』これ白痴教育の始めなり終りなりとは或人の警告に候が小生は實地教育の樣を見て愈其然る所以を覺り申候彼無覺無感なりと雖もまた木石にあらずされば教師諸氏が有する屈せず撓まざる其忍耐と溢るゝばかりの愛情にいつかは動かざるのことや候べき彼の心已に動くここに於てか其一擧手一投足にも注意するに至り候已に注意をこゝに凝聚することを得こゝに教育はこれを施すを得候こゝに於てか教師が有する心理學上の知識も教育學上の知識も始めて用をなし候されば白痴教育の場合に際して最切要なるは基督の愛に候苟も此愛なく冷なる學理にのみよりて其成功を期することは徒勞に候小生は散漫したる注意を如何にして凝聚すべきや心理學上より教育學上よりこれを第一に講究せずんば教育の成効望み難しと數年一日の如く此の點にのみ心を費やし今と相成候ては其一を知て其二を知らざりし短見を悔悟致候

一人の教師一級に9の字を教へ候に反覆叮嚀少しも倦怠の樣子なく百數度も繰返し種々樣々なる方法を以て致し候も覺えず依て更に明日を約し相わかれ通常人の目より見ればこれ實に愚の至りならんも其精神を修養致候初段に於ては往々かゝる至愚のことをも致さねばならぬぞ實に是非なき次第に候

昨日不圖校長の室に參り候處一人の母親久々にて其子に面會に參り候ひしが其子の語つかひ行儀作法等の著しく改まり候樣を見て狂せんばかりに打喜候躰には小生は痛く心を動かされ覺えず暗涙に咽び申候

昨今此教育の必要を覺り續々申込有之候とかにて更に二棟增築中に候當マサチユーセット洲のみにて三千人の白痴有之候由なるが目下校內にあるもの僅かに四百五十名に候其以上到底應じがたく候由

去る日曜にはハーヴァード大學の會堂に出席致し候同會堂は何人と定めず米全國有名の牧師を聘して說教せしむるに有之而して其牧師は數週間全大學の事務室に詰め切りにて生徒靈性上の質問相談に應じ候由中とよき組織に候ブルックス氏在世の頃は氏持切の有樣にて候ひし由なるが氏を慕ふて態々カナダ邊より此地に留學致候人も有之候由以て如何に其勢力の大なりしやを察知するに足り候

いろ〳〵の玉ぬきみだる秋の野の　　　　契　冲
花の千草にみだる朝つゆ

評論

方今の學風

洋書を繙いて直ちに飜譯し、海外に留學して見聞の儘に改革せんとすれば、學問も亦た雜作なき者と云ふべし。經濟學者にして、其家政を治むるヿを知らず、教育學者にして、其子を教ふるヿを知らず、倫理を研究すと唱へて其實際に邪曲賤陋ならんには、抑も之を目して各自の學に勉めたりと云ふを得べき乎。然るに、今の學者は滔々として則ち是なり。

惟ふに當世の學風を以てすれば、其の學者たらんは易し、其の無學者たらんヿ寧ろ難し。もし吾人一流の思望を問ふものあらば、吾黨は反つて今の所謂る無學者たらんヿを欲すと答へん。かの揚々として而して實は空虛なる學者先生の列に入らんに、實際に智識の妙味を掬し得べきヿ幾何かあらん、吾人は初めより之を望むものにあらず。

試みに社會學者に就て問へば、彼等は獨逸魯西亞の社會主義を辯ずるヿ精しきが如けれど、足下の東京に幾萬の蠢々爾たる貧民の状態に至りては、毫も知る所ろあるヿなし、斯ては、其の外國の事情を知ると云へる躰裁の程も推察せらる、蓋し書物を讀みて其の文字を暗誦するの類に過ぎざるべし。我國の義賊は、外國の何々黨に恰當するか、外國に所謂る自治制度とは、我國に曾て行なはれたるヿあらざる乎。凡そ此邊仔細の研究は無くして、名によつて直に異同を論じ、形によつて早計の比較を了す、着眼の一々要緊に中らざるは無論の事なり。

凡そ學風の此如き弊に流れ易きは、古今同轍なり。此を以て、識者時々警發して、其の謬を叱正す。ベーコンの實驗學說を唱道したるより、フレーベルの開發主義を主張せるに至る迄、王陽明の知行合一を說けるより、藤樹先生の新說を叫破せるに至る迄、旨とする所は、這般消息の救導にある也。然るに、後人復た此の救導をすら誤解し、ベーコンの說を理學に專用し、フレーベルの說を教育に專用し、王陽明、及藤樹の說を道德の事にのみ專用して、絕えて其の活氣の溢るゝ所に吸はず、こゝを以て誤謬は復た亦た依然として蟠まる。

嗚呼、躬行實踐の工夫は、德行の事のみにはあらざる也。即ち、實地經驗の手段によりて、活學の呼吸を爲すの謂ひ也。開發主義とは、教育の事のみにはあらざる也、政治、宗教及びもろ〳〵の事業の育成、皆な此手心に由らざる可からざる也。左れど、開發主義と云へば則ち注入なきをと思ひ、躬行實踐と云へば、理想なきとと思ひ、書籍を重んぜざれと云へば直ちに輕んじて多く讀まず、多く讀めと云へば風光山水に接し乍ら尙ほ書に耽るの類ひ、大凡そ拘泥偏僻の誤まりや、容易く除却すべからざるものあり。

女生、學窻を出でゝ實地の家政を掌どる、其實地に學ぶの外に何の家政學かあらんや。而も彼は茫として之を思はず、切りに、學を廢するよしを歎ず。男子、實際世間に出でゝ、百難千難に際會す、修練玆にあり、教育玆にあり、立身亦玆にあり、而も彼は此の實地に修養するの工夫を悟らず、幾度か世波の吾を俗了し去らんとするとを歎ず。嗚呼、庖厨を逃れて家政の書を讀み、事業を逃れて山林に修めんとすとも、何の學業か進まんや。一事に當りて遂行せず、其の難きの故に忌避せんとする程の憶病心をもて、何ぞ能く道に徹するの大勇猛に堪へんや。

近時の人の風采や淺々しき哉、之と談ずると一日にして直ちに其人と爲りを知悉するは難きにあらず。若くは、大義の如く、若くは、大奸の如く、若くは、怯なるが如く、若くは、剛烈なるが如く、茫々無邊にして測り知る可らざる如き類亞の人物は、近來著しく減却せり。新らしき物品の廣告に忙しくて、內部の機關迄を一々自から說明する如く、今の人物は、己れと我自己を顯現して餘蘊なし、亦餘蘊ある可き程の蓄積もなし、天眞爛熳とは、單純の事と思惟せり、正直とは、隱さざるとと思惟せり、高潔とは片くるしきとと思惟せり

今時の人物の面白味なきと何ぞ如此く甚しきや。而して、其由來する所、過半は學風の淺小なるよりす。

曰く、書に隱る。曰く、藝に隱る。曰く。商利に隱る。抑そも、其人や本旨、隱るゝにはあらねど、其形跡に於て隱るゝとゝなりたる底の床しき人物は、今にして餘り見ると稀なり、もし野に遺賢なきを昭代の德とせば、方今は即ち賢者悉皆表面に出で居るの世の中也。

學風何の故に斯く興味少きや。一世の學者にして興味少きが

爲め也。一世の學者何故に興味少きや、夫等を先覺たらしむるもの丶意氣地なき也。左らば、遂に誰をか罵しらんとする、其の罵しらんとする所のもの先づ自から罵しらずんばある可らざる也。

雜録

野路の菊（小説）

紫琴女

其三

有爲轉變の世の習ひ、昨日までは玉樓金殿の裏に住居し貴人さへ、今日は往來の人に道を狹められ車夫にさへ叱り飛ばされ、見るもいぢらしき姿となるがある世に、算盤珠の外れ易き、商業界に身を置きし金三の、流行紳士ともてはやされしも一時。淵は瀬となる世の中に、名詮自稱の金三のみ、爭でかは其數に漏るべき。兼てしも主なる財源と賴みてし會社の一朝祝融の怒りに觸れて、十年の經營立處に灰燼に歸し、百千の株劵頓に市場の聲價を失ひたるより、爭で之れを恢復せばやと、再興の計畫にをさ／＼肝膽を碎く折も折。我名義にて營みし私立銀行の、忙しき儘是迄人任せにしたるが、何事もなかりしに、役員の不始末より破產の不幸に逢ひ、無限責任の悲しさには、債務悉く金三の一身に集りぬ。されど金三は年頃の派出やかなる暮しに少なからぬ借財もありて、巨萬の富を重ねしと見えしも、其實融通一つにて支へたる身なれば、今斯く重なる不幸に逢ひては、資產の全部を、手離さではかなはぬ仕義となりぬ。其噂早くも傳はりて、債權者の名々、我も／＼と先を爭ふて責め寄するにぞ、流石商界の一老將も、力竭き謀窮りて、我住居さへ保ち兼ぬる樣子を、見て取りし妾のお艶、足もとの明るき内に、辭し去るが上分別と思へるにや。或る日金三の機嫌よき折を見て、今日此頃のお心遣ひ、私の眼には歷々と、其お窶れが見え升る。所詮女の身の力及び升ねど、日頃の御恩報じは今日此時、もとの島へ戻り二度の花咲かせむも、夫れは却て旦那樣のお顏汚し。夫よりは私が下女代を致してなり共、口を減させまし度心なれど、馴れぬ水仕事は、奥樣もお遣ひ遊ばすにお骨も折れ升う。まだしも慣た事なれば、素の土地へ歸り升て、お茶屋でも始め

たならば、私の古い馴染もあり、旦那様の御贔負受けたお茶屋も少からねば、引立ても呉れ升う程に。さすれば旦那の、お助けとはならぬ迄も、私とお靜の二人口に、御心配かけぬだけの事は出來升う。別に資本の入ると申でもなし座敷の飾り夜るの具皿小鉢の幾許かを、分けて戴けば夫れで濟みまする。如何なものといひ出たるを、痩ても枯れても我は淵瀨、そなたの力を借るまでもないと、初めは笑ひて取合ざりしが、お艶が切に請ふて止まざるにぞ、さらばそなたの氣の濟むやうと、島の内に相應しき貸家求めさせて望み通り引移らせぬ。お艶は得たりと我衣類調度は更なり、其外何くれとなく借受けて持運び。始めは本宅への音問怠らず、金三をも屢呼び迎へて快く待遇し夫是の事指圖を仰くにぞ、金三もかゝる場合ながら、新に別莊得たる心地して、掛物も是、敷物も是と、追々に本宅のもの持來りて、多くはお艶の方に在るにぞ、お艶の新宅躰裁よく調ひたる頃は、淵瀨の倉庫はいつしか空しく、座敷までも明屋めきぬ。お艶は此處等が見切り時と思はぬにはあらねど、頓には冷なる氣色も見せず。されど居心よき儘に、何日迄も金三の入り浸らむには、樣付の居候置きたるも仝樣にて、果は斯く迄謀りたる甲斐なからむと、追々には針を包みたる美しき詞にて、お客商賣に殿御は禁物、殊には世上にお顏廣き旦那樣の、此所に居玉ふ事人に知れては出入るお客の、氣を置かるゝもあるべきに、成るだけ人に、お姿の見えぬやうにし玉へかし、此間も御存知の何某樣二階にて大浮れの最中、旦那樣のお聲聞えてより、拇指は内にかと俄の大しけ込、夫よりは花々しき騷きもなく、匆々にお歸りなされしより、私も始めて氣が付升た。商賣大事と思ひ給はゞ、其御心し玉ひてよと。いふは正しく我を遠ざくる算段と金三は未だ心付かねど、折角氣保養にと思ふお艶の家に在りても、お艶は多く座敷へ出で、傍には居らぬ勝なるさへ、飽かぬ心地せらるゝに、此上一室に閉籠りて、影さへ人に見せられじとは、ても扨も窮屈なる事と、少は面白からず思ひしにや、其後は足も自づと遠ざかるを。お艶は結句、よき事にして、強ては迎へず來ればよき程に待遇せど、以前に變る不愛想は、遂に金三の眼にもつきて、己れ不埒の婦人めと流石の金三も怒らぬにはあらねど、流の身には有がちの事と、夫より後は音信もせず。此時にこそ金三も、無明の夢の醒めけらし。』

此間に立ちて殊勝にも、いちらしきはお靜にて、是はお艶の養ひ子とはいへ、稚きより淵瀨の本宅に人となり、石女のお艶の、可愛がるやうにて、怖らしきよりは、萬事物和らかに、情け深き本妻お秋の何となく慕しく、多くは其が傍に在りしに、お秋も亦遣る方もなき心の憂さを、此無邪氣なる少女に慰めむとてか。お靜〱と呼寄せての、優しき慈愛身にしみて嬉敷。果は讀書き、裁ち縫ひの道しるべさへ、お秋より敎へられて、おぼろげながら女の道をも辨へつ。我母なるお艶の、お妾さまといはるゝ身なるが、情けなく恥かしといふ事も分り。責ては金三を父樣と呼ばるゝが勿躰なけれど嬉敷事に思ひて、日を送りしに。ゆく〱は金之助樣のお嫁にとの、お艶の心構へ聞知りてよりは、身を重んずるといふやうなる心も出來て、お艶よりはお秋を見習ひ、蓮葉ならぬ育ち頼母しかりしに。お艶の方へ引取られてよりは、昨日までもお孃樣と呼ばれし身の。何事ぞ生酔の客に、手を引張らるゝ事もあり、なまめかしき藝娼妓より、姉さんと親しげに言葉掛けらるゝが、身を切らるゝより辛く。などて母樣の、かゝる營業し玉ふらむと、夫れさへに悲しかりしに。日頃好まざりし三味線一時に浚へさせられて、明る春よりは藝妓に出ねばならぬ身の、其撥の持ち方はと叱られてより。扨はさうかと一層我身の上悲しく、爭で父樣の、かゝる折にも來まさむには藝妓にならで濟むやう、母樣にもいふて戴かふものと。坐ろに金三の上忍ばれて、お艶に金三の事聞合す時あれど。お艶はいつも不興氣にて、父樣とは往年の事、私をもお前をも、お捨なされし淵瀨樣の事、何日迄も父樣といふものでなし。聞けば此頃夫から夫へと引越して、今は何處に居らるゝやら、分らぬといふ人の噂。何れに此後よき事はなかるべきに、父樣と呼ぶは私は素より、そなたの爲にもならず。夫よりはそなたも年頃、今に我腕一ツにて、善き父樣探しあて、可愛がつて貰ふがよいと。果は笑ひに紛らすを、思ひかねて再び問へば、夫れ程淵瀨樣の戀しくば、そなたの勝手に尋ね行くがよし、味噌漉さげて使に遣らるゝ姿、我は見るのが嫌なれば、其日限り、我とは緣切と思へかしと、夫は〱つれなき詞に。金三の上お秋の上扨は東京に在る金之助の上まで、氣遣ひは氣遣ひながら、何處を尋ねてよきやら分らず。小さき胸にはおきあまる思ひに寐られぬ夜もあるを、情知らずのお艶は、

夢にも知らで過ぎけむかし。

柞葉の露

棚橋絢子

凡、世の人、皆、望外に得られし事ある節は、其の悦も、亦、格別なるが、わきて、幼き時は、思はざるに、美しく且、適當の品を得し折の嬉しさは、又、一入なり。おのれ、五六才の頃、隣家に算術、習字の師匠あり。近く行きかふうち、戯れに、八算見一を、己に敎へられしが、其の頃は、幼稚の女子に、算術敎ふるなどは稀なる世なれば、いと珍しとて、かなたこなたにまねかれ、八算とはいふもの丶、夢中に、十露盤球を動すのみなれど、それの賞として、或は手まり、或は手あそび、又は團扇など貰ふ中にも、團扇に美人を畫けるが、其の形といひ、美人の姿といひ、子供心に、眞に麗しく、よきものと思ひ、類なく、うれしかりしこと、今に忘れざるなり。

又、七八才の頃、音曲の稽古をなしゝに、生來、好まぬ事なれど、當時は、女子にして音曲知らざれば、恥かゝやかすこと多し。故に、母の懇に諭されしを、成程と合點はしながらも、とかく、怠りがちに打過しゝが、稍長ずるに從ひ、恥かく事の恐しさに、折にふれて温習などすれど、元より、好まぬ業にしあれば、漸、糸道のつきしばかりにて、是といふ程に至らざる儘、とやせん、かくやせんと、獨考ふるうち、ふと、心付き、かゝる事を、いつ迄なし居るとも、到底、人並の事は出來得ざるをさとり、斷然、やめんと思へど、母の懇篤なるさとしを、むだにするは、誠に心苦しく、さらばとて、かく迄好まぬ事に從事するは、無益と覺悟し、其の旨をのべ、譬、此のわざにて恥かく事のあるとても、毛頭、怨むる念慮は起すまじく、是こそ、眞の自業自得とあきらめ申すべし抔、母に懇願しければ、左程に思ふものならば、心任にすべしとゆるされ、夫より、父にこひ、句讀を授かり、讀書の樂にかへしなり。されど、後に至り、かゝる、母のいつくしみなくば、聾とひとしく、いかに不自由を感ぜしならん。と思ふにつけても、其の有りがたさ、かたじけなさに、なみだも、そゞろに落つるばかりなり。

おのれ、元よりの惡筆なれば、よき師につき、學び度思ふ折から、幸、三瓶信庵先生の、門戸を開き居られしをきゝ、其の門に

入らんことを、父にこひたるに、一家多人數、加ふるに、弟妹も多し。かゝる混雜中、迚も仕遂ぐること能はしとて、許されざりし故、母になきつき、願ひしに、母のいつくしみにて、父に知らさず、通ひ習ふ事となりぬる折のうれしさは、天にも上る心地せしなり。

露の小萩

白衣

海よりも深く、山よりも高きは親の惠なり。身を海の底に沈め、山の奥に朽たしめてもと願ふは子の心なり。乙女が優に美はしき心に、高き清き道の願をかけて、一向すゝまんとする時、堪へかぬるは、父母が、子を思ふての、あらぬ諫と、その品にもあらぬ縁談となり。我知れる人に此人あり。想ふて胸しきりに動く、波寄せて喉を衝く、溢れて聲となる。こは此聲を記せるものなり。

たらちねの　み手づから　ぬはせ給ひし　袂にも
なみだの雨や　そゝぐらん
子を思ふ身は　親ごゝろ　五月やみには　あらねども
爲よかれとて　おもひをも　くだけば　ちゞに亂れつゝ
枝もたわゝに　おく露に　小萩がもとの　かなしみを
いかなる方に　なぐさめん
世に有がたき　みこゝろを　おもひはかれば　いかにして
たとひ　此身は　折れんとも　はねかへすべき枝はなし
さはいへ　人とうまれきて　御空にたかき　ひさかたの
月の光は　けだかくも　此世のほかに　すむものを
そのみもとには　のぼりえで　つひに　むなしく　あやなくも
むぐらが下に　おほはれつ　ちりにまみれて　終りなん
此身おもへば　又さても　あさましさのみ　まさりきて
小さき胸は　つくも髮　もつるゝ末の　とけはせじ
ま球のかざり　忽ちに　蛇とかはるか　價なき
錦もいまは　つゞれなす　はかりがたきは　世のならひ
惠も　人を殺すべき　刄とこそは　なりにけれ
親のおほせを　そむくべき　この身にしもは　なけれども
思へば悲し　すゞしくも　すける肌は　つゆばかり
浮ける心も　けがれたる　思をとては　志らずして
ひたすら　ねがふ道のため　立てし望の　かひはなく
すゝまん方も　情なや　けはしき山に　さへられて
あらぬ境に　身をさへに　任せよとしも　すゝめらる
竹のこゝろを　一すぢに　ぬくは　女の道ならじ
さりとて　やはか　撫子の　大和心は　あるものを

風にまかせて　世の人の　あだには　いかで　なびくべき
もゝの剣を　いちどきに　さしぬかるゝは　安からむ
なさけと義理に　せめらるゝ　身のしあはせを　いかにせん
神の　ゆるさせ給ひなば　たゞ此まゝに　かぎろひの
きえ失せたくは　ねがへども　それも叶はぬ道なれば
空ゆく月を　ながめては　うらやむ外に　すべはなし
行方しらず　右左　とるべきすべも　思ほえず
ほゝにつゝめる　はちすだに　いつしか見えで　唇の
玉の色さへ　かくれけり　日によわりゆく　霜がれの
菊ぞ　わが身の姿なる

はるかに　天を仰ぐれば　うれひなせそと　やさしくも
罪かさなれる　わらはをも　すては給はず　呼たまふ
エスの御こゑは　きゝながら　迷ひまどへる　まなこには
むら雲のみし　おほひきて　君がみかほの　見えはせず
憐れみ給へ　救世　世におそろしき　ぬす人も
すくはれにしも　みゝずなす　土にはひ居て　ちりに生く
我身なりとも　祈りなば　などか　しるしの無かるべき
すてな給ひそ　大御神

涙をかてに　いたみつゝ　打ふす床の　つめたきに
こほるつらゝの　思せり　みかげをだにも　見せ給へ
君が柔和の　御姿を
胸のいたみに　たへかねて　にげ去らんとて　みまへさへ
うしろをむける　わらはをも　たすけて　君がふところに
息はし給へ　と　願ふなり
よわき心は　そよと吹く　風にもたへで　さわぎ立つ
葦のためしの　なほ更に　おつるなみだは　止まらず
我まごゝろの　足らざれば　人の心も　くみしらで
情厚かる　方々に　そむくとしれば　中々に
罪よりつみに　分け入りつ　尚も迷の　まさりきて
今は　身も世も　あられねば　つひに　救のみちかひも
我身の上に　あらじとも　思はるゝこそ　かなしけれ
かなでのいとは　せまりきつ　心の琴をはりつめて
松風のねも　いつしかに　あはすしらべは　絶にけり
あな　痛はしき　乙女子の　泣かん涙も　なには潟
あしもえたゝず　たふれふし　動きもやらず　風ふけど
雨はふれども　さりやらず　黒きひとみは　ありながら
えみのさざなみ　立ちはせず

あはれ　いかにぞ　天なるや　御使だちよ　みつばさに
天かけりきて　美はしき　一もと萩の　そのくちに
口すひせよな　おくれなば　ちりやそめなん　時すぎば
枯れやはつらん　あはれ　みつかひ

夏野にて

泡鳴子

限りも　知らぬ　あめ地の
ひろき　野なかを　さまよへば、
おもひは　浮かぶ　志ら雲の
千々に　くだけて　あま飛ぶや、
かろき　わが身の　ふるさとは
過去か　然らず、來世か　あらず、
みどり　あまねき　すゞかぜの
つきせぬ　いのち　呼吸して、
人間　つひに　朽ち果てず。
樹だちの　うちに　一すぢの
みちを　見とめて　踏みゆけば、
志ら露　散ッて　こゑも　なし。

染井の岡

曲浦

今日は日曜日なり、小春の空いと麗かに、風も暖かなり。亡き君の長女子の、我を促がして、母様のお墓に連れ行きてよ、さらばと、其父なる君の御許し得つ、夕まぐれの風、寒からぬ間に歸りね、いざとあるに、午後より、我は彼長女子を、また彼義弟の君は、仲なる男兒を伴ひ、共に車に上りて、秋は今日、天の戸渡る雁の涙や染めし、諸人の嘆きの涙は、木々の梢に、紅葉の色を染井の岡なる墳墓に詣づ。ゆく道すがら、我膝の上なる長女子の、母様のお墓は、何處でありしか、忘れたり、彼紅葉の麗しさよ、あの木の下に母様が、居給はゞよきになど、喃々耳語するもいぢらしや。道程暫くにして行き着きぬれば、おり立つ墓畔の茶屋にて、閼伽の水、命じつ、これより徒歩にて詣づ。守る人の心行き届きたるは、四邊の塵も留めず、箒の跡あらはに、淸く拂はれたるにて知られ、何時誰の手向けにけん、香の名殘り、うら枯れし數輪の菊花、其影さびし。道にて求めたりし菊の枝、去年までは庭の面に植ゑて君の愛でたまひにし、千代の花、其下水老を

團子坂の菊は、見頃の盛りも過ぎし程なれど、今日こそはなほ訪ふ人の多からん、歸りがてらに行きても見んかと云に、幼兒は早や其心になりて、いざと急き立てつゝも、心爰に殘りてや、今一度母樣の處にゆかんかとも云へり。さて再び車に上れば、また長女子の我に告ぐる耳語の中には、染井よりは、團子坂がよし、されど染井には、母樣が居らつしやるからとは、聞く我が折柄の情、人は思ひやりても見よかし。團子坂に集ふ諸人、今は憂も悲しみも知らぬ顏に、絡繹として徘徊す。菊人形の目覺しきに幼兒は喜びを催し。また彼花簪欲し、此花籠欲し、家土産には何よからんと、心は全く此邊に集りて、墓參の事々、はや念頭を去りて留まらざるに似たり。無心のさま、羨むべきに堪へで、またいぢらし。

既にして家に歸れば、日漸く暮れて、晝の間より中空なりし片割月の影、其光りを增して、淸らかに庭前の柳梢に懸れりき。此夜彼父なる君の他より歸りまして、今日はいかにてありつると尋ねたまふに、さらば答へは何とかせん、たゞ何事もあらで、御墓はいと淸く拂はれてありしよといひしのみ。

握くとだに、きくものを、今年は早う世を去りたまひしあとの御墓に捧げて、閼伽の水、濺ぎ參らするぞ悲しき。幼兒の我れ勝に、母樣に水參りなんとするに、それが爲めかあらぬか、從ひ來りし、茶屋の女の、啜り聲するは泣くにかと、をりからに哀れを添へぬ。我はいま此御墓に詣でゝ、何をか告ん、胸塞がりて言葉なし。幼兒にいで母樣に、おじぎしたまへと勸むるは、現世に殘し玉ふ紀念の幼兒の上にこそは、亡き君の憂き事知らぬてふ、御空の國に在しても、これのみや、憂き事の一ツにてあり玉ふらんも、靈爰に在して、見たまふことあらば見たまへ、過にし夏は、恙もあらで暮しつ、斯は健に生ひ立ち給ふをとの心よりなり。情を厚くかけ給ひにし我も、亦病多くは愈りて、今如斯く壯に、此幼兒等と朝夕を共にして、事々に君を忍び出で參らすになん。心の中にかくは告げま欲く思ひつゝも、見にたゞ何心なきは幼兒なり。軈て拜辭して、墓門を出でゝ近き日此岡に葬り參らせし、川田の君の墳墓を訪づぬるに手向の造花立花、標木を擁して廣く幾重の籬をなし多くの榊木の林をして、其後に茂れるも、亡せにし人の何を見ましや。

ひとつ心

高瀬花陵

大空をいゆきわたりて　かゞやける日の光はも
賤が屋をやみに殘して　あてびとの家のみを照す
くまもなく夜をば照る月　美はしき玉のひかりを
高殿のうちにおくりて　しづの女の袂やさくる
いかなれは世の人皆は　おのがじゝさまよひゆきて
ひとと我と物されさを　あだのごと離かんとはする
はな鳥のはしき色音も　めでたしとおもふ心の
淺みゆゑ人のなさけも　なか〳〵に恐れこそすれ
菜のはなは馴るゝ蝴蝶を　なつかしとわが思ひつゝ
手の上に來ても遊べと　招けどもかへりも見なく
木隱れにあそぶ小鳥の　歌をしもわがなつかしみ
近きて聞かんとすれば　あし音になく聲やみぬ
大路ゆく乙女がそでを　引とめて言とはましを
他人とわれをやおもふ　足早にはしりゆきけり
天地はひとつこゝろを　『我』といへる闇にかくりて
見る人の目にし見へれば　乙女はもまごひけるらし
天地のひとつにかへれ　乙女子と手たづさはりて
野にいでゝ蝶となれつゝ　鳴く鳥を聞くがたのしも

隨感

○水車、秋聲に歎ず

秋の木の葉、凋落し、冬枯の景色さびしく、一歳の終、やうやく近づきて、日に日に一日づゝ失せ逝く心地のする今日此頃の思ひこそ、悲しけれ。顧りみれば、來しかたは夢のごとし。前程を望むに、亦た夢のごとし。霧を破つて立出し身の、霞をながめて空しく佇立す。深山幽谷に獨り旅して、あやしき鳥の音を心細く聞くの感あるもの、更に落葉の水に浮んで流れ去るを見ては、寂寥そも〳〵誰ありてか愈す。人生の行旅、幾万里、八方世界、何等の侶かある。髣影子、斷えず吾に隨へども時として忽然として消ゆ、而も渠は物語るとなし。天地、情あり、星燦めき、露滴たるが如けれども、抱きて契心の秘密を談らんやうなし。つら〳〵惟んみるに、歳を經るの價値幾何ぞ。事業を重ぬるの意義何事ぞ。黃金を積んで、吾が得たる新らしきものは如何ん。勳位を高うして變化せし

姿は何處にありや。小車、日に轉じ、大車、月に轉じ、一歲轆々として只管らに廻るの時、車中の軸、俄然として目覺め、嗟歎して曰く、我、何事をか爲しつゝある、水、上より落ち、下に流れ、車輪、巧みに轢りて歌ふ、抑そも誰が爲めの踏舞奏樂ぞと。問ふに應ふるものなし、水聲ひとり高し、風籟ひとり高し。

○人を見る葦の如し

世上の褒貶に心やりする人こそ、まだにぎ〳〵しくはあるめれ。毀らるゝときは、左こそ心細くもあるべし、飜へつて、賞賛せらるゝ時は、莫大の朋友ありと思ふならん歟、其の喜悅察すべきなり。時として之を失ふの悲感は痛ましけれど、亦時として之を得るの快味は言ひがたかるべし。左れば、此等の人の心は、市に住へり、尙ほ陽氣のけはひありとこそ言ふべけれ。但だ夫れ世間を見ると荒原の如く、人を見ると葦の如く、褒貶の聲を聞くと風の音の如く、ひとり孤軒に獨座して、我ひとり自己を思ふの士にありては、漠々たる天地間、果して何人をか同情の相手とはなすべき。但だ夫れ中心の叫び惣ての聲に優り、吾が胸裏にひそみたる不可思議の一人あり、相和して我を呼ぶ。則ち其の聲を聞きて其人に交はると彌よ熟すれば、かれが小天地の抑そも宏い哉。われ玆に於てか、眞誠の知己を得たり。

○鬱憂に二途あり

憂鬱の念は、他の事を思はざる時に發す、我が利己の感想の次第にもつれたる結果なり。須からく、鬱思をやめて、直ちに戶外に出づべし。眼頭歷々として、可憐、悲慘の事實を照映し來れば、空たる憂悶は忽焉として去り、一片の俠骨、我を激して自から勇躍せしむるに非ずや」。念へらく、憂鬱は、心機を一轉せしむるの蓄積、其の茫たり漠たるは、即ち、善根禍根、ともに此に宿するの故なり。古の豪傑、万骨を枯らして虛榮の血に渴するの際、俄然自覺して、其の狂亂の價値なきとを悟り、則ち、初めて厭世す。此の輩、此時の憂鬱や、むしろ聖地に進むの方針に臨めり。

○女性を識らざるの元由

絹布を着せて演劇でも覧せれば大満足なりとは、男子が女性を見くびりたる淺薄の鑑識なり。女性を見るの眼識なきと、斯の如し。其の取扱ひの着々として誤まることあるは、當然なり。從前の文士、高潔の婦人と相交はりたると稀なり。多くは賤劣野卑、人の器械たるとを甘んじて、殆んど廉節を磨滅したらんと思はるゝ淫れ女を弄びて、而して之をもて女性の例證に用う。其の見識の自づから陋猥なるは、之が爲め也。左れば、男子が女性の粹美を知らざるは、啻に其の迂なるとを證するのみにあらず、併せて、其の賤劣なるとを證明す。彼等が高潔なる婦人に近づくとを得ざりしの反證なり。故に、吾人は、女性を輕んずるの男子を見て、直ちに其實際の品徳を推知するとを得べし。人安くんぞ廋さん、男子、何爲ぞ故なくして、女性を輕んずるの理あらんや。

○游子其内助あれ

遊子は故郷を懷ふ、旅に出でて其家を慕はぬはあらざるべし。家を慕ふて、貞婦の空閨に留守するを念ひ、其の忠清にして義烈なるに感じ及ぼさんときや、如何なる放埓男子と雖ども、肅然として恐懼せざるはあらざるべし。然るに、感化之に及ばず、男子家を出でて、隨所に恥を遺すとを疚しとせざるは、啻に男子の悪しきのみにはあらず、内助の感化力の足らざる也。夫れ、内助の理想たる、郞が胸中に入つて常に其の内部に住ひ、千山万水の到る處、斷えず其の情緒と伴ふとを得べきにあり。然るに何ぞ、游子故郷を懷はず、家を出でて家を忘るとは。室家の樂しからざるを知るべし。其過ちの歸する所、抑そも何處ぞ。嗚呼貞烈の淑女、何んぞ其の高潔の徳をして、つねに郞が多恨の胸底に伴隨せしめんとはせざる。

○理勢同しからず

仔細に現時の實勢に鑑みて、大是の潛かに定まり默して動く所以の消息如何と考ふべし。大聲は俚耳に入らざるのみならず、亦た要路に入るとなし。黨人の囂々抑そも何程の効驗かありし。審に、眞相を知るものは、明かに、眞因を察

るべし。大勢の運移は、驚く可き秘密の樞機によつて左右せらるゝにあらずや。左れば、風評の集まつて新聞材料となり、新聞材料の集合して歴史となる所以を知らば、堂々たる文明消長の史論も、必竟は凡俗の風評を種とするに過ぎざる耳。あゝ、史論及評傳の大率ね實地と相背くの理、少しく察することを得ん。滔々たる評論、之によつて大抵は空しき世話となり了する也。

○死と眠、差別何如

世に初めて死と云ふとの出で來しとき、傍に眺め居たる親しき人の感じは如何にてありけん。未だ曾て死の終りたるとを知らざるに當つては、死は即ち眠に異なるとなし、誰か其の悲慘を覺らん。今夜われ愛兒のすや〳〵と眠る寢顏をながめて、涙落て禁じがたし。生死もと一縷の息にかゝる。脈動、さゝなみの滿干に及かず。人間の生命何ものぞ。遙かに蠻人の歎きを喜びて、吾が愛情の喜を悲しむ。

時文

○海戰畫帖第二集（威海衞の卷）

若林欽著
春陽堂版

此卷には趙北嘴砲臺の破壞、鹿角嘴砲臺廿四珊砲の中斷、一月晦日の暴風、小砲艇風波を犯て榮城灣に錨泊す、筑紫上甲板敵彈を蒙る、廿二號水雷艇狂瀾怒濤を冒して勇往す、廿八年二月七日威海衞港砲擊、六號水雷艇の襲擊、小鷹水雷艇敵艦來遠を沈む、靖遠の沈沒、陰山口碇泊中の大風波等を載す。若林大尉が畫筆よく、壯烈悲痛、慘憺快絕の景を示して遺憾なしといふべし。

○小紘集

政教社同人編纂

雪嶺桐川其他政教社同人の筆に成れる短文小品の嘗て、亞細亞、日本人等に見えしもの、之を集め、名づけて『小紘集』といふ。大紘の嘈々急雨の如きと共に、小紘の切々私語の如き、頗る愛すべく政教社同人がこの私語集、頗る好愛すべきを値す。

○少年志叢第一卷（六無齋子平）

裳華房發行

同書店にて發行せる偉人史叢林子平の傳を、少年の讀書の爲めに簡易にしたるものなり。博文館の『少年文學』などゝ共に、少年の有益なる史傳書といふべし。

○鈴舟

三木天遊作
新小說第五號

ゆくりなくも柳浪が『河内屋』と、或ふし〳〵の脚色を同じうせるとを發見したるが爲めに、筆鋒中途にして、神輿を殺がれ駄作となり了したる旨の斷り書きあるこの『鈴舟』は、まことや見すもがなの駄作なることそ遺憾なれ。大坂何某會社の重役に、星新右衞門といふがあり、其娘に初野、喜美子とて二人の愛孃あり。然るに新右衞門には家を繼がすべき男子なければ、櫻井春雄なるものを初野の聟にと定めしに、喜美子なるものは兼て春雄のために無胥の戀にあぐ

かれなりしこそわりなけれ。誰れとて之れを知るものなく、喜美子獨り憂悶煩惱するのみ。春雄遂に初野の壻とならんとす。喜美子之に堪へずして、秘書を以て父を促して、姉に代ふるに已れを以て、春雄の妻たらしめんとを以てせんとしたるに、其秘書父の手に入らずして姉の奪ふ所となる。春雄遂に初野と婚す。喜美子避けて春雄に面せず、然るに姉の大病によりて、已むを得ず之と會したるに、春雄は熱心に喜美子を慕へするものなり、夜庭園に出で丶、春雄情を以て、喜美子に逼る。然るに如何にかしけん、春雄俄に發狂し、喜美子立死す。

趣搆が似たといへば『河内屋』に似たふしもあるべし。而し迚てもそれとは比ふべくもあらぬぞをかしき。編中の人物一向に一定のキヤラクターを備へ居らず。作者の意は端無い娘として初野を描き、物靜な内氣なる娘に喜美子を現はさんとしたるなるべけれど、讀者には凡て反對に見えて、眞にお鍋が評言の如く、お氣の簮い、お優しいお慈悲深い、お孃樣（初野）、小孃樣（喜美子）の氣儘者の疳癪持の威張りたがりめといふが適切なるぞをかしき。子守より成り上りの女中お菊は、忠義者としてあるに、如何にも利己的なる擧動を度々なせる、またその俄に新左衛門が姿となれるなど、どうしたものやら、かうしたのやら、蔭張り譯が解らぬなり。春雄が戀といふも丸で定かならぬ事など、これや支離滅裂、結搆据らぬものとやいふべき。

○露の蝶　同人作　同　書

『鈴舟』は駄作なり、然れどもなほ『露の蝶』あるあり、見事之を以て、讀者のごてツ腹見事打拔かんとまで、天遊が自分免許の高慢を吐ける此作なり、成程『鈴舟』に比しては、先づ〳〵無難の作とはいふべきも、さりとて感服するまでの所へは行かず。十六七歳の可憐無邪氣の少女お蝶、家貧に父病むの、悲境に處して、アバスレ惡婦内田のお内儀の仕込みにより熱々浮世の姿を觀んじて、見事莫連者になつて見せる話、其筋には奇異なるものなき丈けに、通じてはあれども、此作を讀むの時、お蝶が十六七歳の齡なるとを念頭に置いてゐては、其人世に觀じて、エラサウな事をいふのをきくはまとに可笑しき心地して、小說の主人公其人の語とは受け難く、作者自身で議論してゐるとゝ思はる。全篇に現はれたるお蝶に、女らしき處なくして、彼女は恰も涙六張りの俠客が娘の衣裳着けて啖呵吐くが如き觀あり。

天遊の名は新躰詩に於ては、屢拜見したれども、小說は此度が初陣なるべく、初陣にて見ん事やり損じたるぞかなしき。さりとて失望したまふべからず。序にいふこの作者は、殊更に似つかぬ戲言をいふの僻ありて、甚だ宜しからず、また文句にトンチンカンなるもの、多きなどよく〳〵吟味ありたきとなり。

○かまわぬ坊　水蔭作　春陽堂版

房州鋸山に一僧あり、彼其在世の昔を語りて曰く、已はこれ馬喰彌助の遺子鎌吉といへる美少年、何んでも「かまわぬ」を主義として、荒馬を斃し、壯漢を殺し、怒濤を凌ぎ、壯士を助け、權勢を冒す等、彼が一生の歷史悉く、これ「かまわぬ」の主義によらざるはなし。已が柔術の師、讒者の爲めに、世を潜める、月村逸角の娘お縫は、この美少年鎌吉に對するの女主人公なり。このお縫を助けて父の仇を打たしめたる後、またお縫死するや、世を果なみて、月村一家の菩提のために、かまわぬ坊と稱して、鋸山山麓に遁世し、佛壇にお縫の紀念の匂袋誰が袖を掛けて、其人在世の情を忍ぶもゆかし。

これぞ水蔭が明治二十三年頃の作とかや、今となりては水蔭自身も、なる程未熟であつたと感ずるなるべし。

永洗の口繪、中々に心を凝らしたるものとは見ゆれども、鎌吉の目の付け處、鉈の振り上げ樣、檣の切れ目、それ〳〵一致してならぬは如何。あの風にては鎌吉檣を切りおほせさうもなし。

自殺は、これ故保田石羅が遺稿とかや、情狂の一青年が鋸山に自殺する、悲慘の話なり。

○小說六佳選の批評は次號

女學文壇一斑　十一月上半期

◎婦女身章　救世の光第六拾八號

◎巴理の情交　世界の日本第八號

◎現今の女子●女徳の衰頽●女子の職業	早稲田文學第廿一號
◎文明社會に國風の獨立を許さず	時事新報十一月八日
◎女子の職業（製紙女工、板紙箱女工）	報知新聞連載
◎女子教育一斑（三輪田眞佐子）	女鑑第百二十號
◎印度の婚禮井婦人の位置（片桐盛治）	太陽第二十二號
◎學校教育を受けたる婦人●女德益頽廢●女學雜誌の恬然（雨夜亭）	經濟雜誌第八百五十一號
◎婚姻論（藤井宇平）	太陽第二十二號
◎熊本尙絅女學校の俄的運動會	讀賣新聞、日本新聞、自由新聞等
◎女子教育（藤本善治演說）	山梨日々新聞十一月八日より十四日まで
◎佛教夫婦論、續（横井雪菴）	密嚴教報第百七十一號

片　士

◎皇后陛下乙夜御覽の新聞は
時事新報、東京日々新聞、毎日新聞、報知新聞、日本、國民新聞、中央新聞、東京新聞等にてあらせらるゝやに承はる。

◎赤十字社　の勢力强大なるとは、單に我國該社の現狀を見ても知るべし。然るに同社運動の首唱者たる瑞西國の義人、ヘンリー、デュラン氏は、年老いて窮乏困苦を舐め、目下故國の病院に病を養ひつゝありといふ。吁彼が事業は、万國を聯合一致する、十九世紀の最大勢力の一となれり、其義心の報酬如斯きを見れば、デュラン〻また何の遺憾か其窮乏を憂ふるに遑まあらんや。然れども亦彼をして此窮乏に陷らしむるは、彼が主義を奉ずるものゝ忍ぶべき所にあらず。

◎女鑑紙上　加藤某女史の小生が嘗て記する『女徳の美觀』に對して、懇篤なる駁論を辱うするを謝す。只憾む、女史の反論一々吾人の志を得ざるとを。予は到底女德論に於て女史の流と一致すると能はざるものなりと雖も、女史、請ふ、幸に再び彼論を讀め、女史の捉へて、議論の要旨とせらるゝ處は、必ずしも、予が要旨とする處に非ずして、女史の精讀、其眞旨を知るを得んには、また必ずや女史の意を得るに邇きものあるを信ず。（鷗村）

◎雨夜亭　何の緣ぞ、近來經濟雜誌によりて、頻りに、女德の衰頽をいふ、誌には、女德の衰頽をいふあり。今はまた其論を再びす。由來雨夜亭の同眼、頗る輕率、殊更に奇を好んで、大袈裟に女性をイザメんとする形跡の歷々として見ゆ。弱い者イザメは大概にして、今度は男德の衰頽の事御苦勞に預りたし。序に今少し女性の本相なるものを研究なされたし。惜むらくは、雨夜亭の眼中、女性を見るの明なし。

◎熊本尙絅女學校　の天長節運動會、の記事、先づ同校反對の新聞に揭げられて、端なく物議の種となれりしぞ遺憾なる。然れども彼新聞紙の記するが如きは、多くは事實に遠きものあらん。勿論女性の擧動に少し荒々數なる處の多かりしにてはあるべきも、こは、熊本人士氣風の武人的の處作を示したるが少し度に過ぎたる位の事ならん然るに彼様の珍事もありし、此樣の怪事もありたりと、あらぬ事まで結撰して、毒筆を揮ふ新聞記者の行爲の歷々として厭せらるゝにも拘らず、世人の此等を信ぜんとするは、該校の爲めに惜むべし。

◎板紙箱女工　は東京市内に凡そ四千人あり、其賃錢は十錢より二十錢に至るといふ。

◎九歲の少女　にして瓦斯糸織に精巧なるもの、山形縣にあり。

◎台灣生蕃の女子　飯田參謀の生蕃觀察談中に曰く
婦人の襌は前より一枚を後へ廻はし、後より又一枚を前に廻はし、如何なる動作をなすも、陰部等の露るゝことなし。中には脚袢を穿ちたるもあり、一般婦女子の仕事は、日本の農家の婦女子に於けるが如く、農業の手傳をなして出精勞働し、此中にも恥らふ性質を備へ、途中にて日本人にても、出遭ふときは顔を背けて通るを常とせり。又我々が蕃人の家に行くにも、婦人は容易に遭はざるなり。

◎洋紙女工　全國に九ヶ處の洋紙製造處ありて、之を使用する女工の數は、報知新聞によるに左の如しといふ。

社名	女工數	社名	女工數	社名	女工數
王子	一二九	富士	一四七	神戸	七六
千壽	六〇	四日市	七四	布恒	二三
磯野	二三	下郷	二三	阿部	一八

◎東北の女子教育　開發社の中島半次郎氏が、東山道三縣學事觀察記中に曰く、栃木の現在の高等女學校は漸次隆盛に赴かんとし、福島にても早晩之を計畫するなるべく、宮城にては、既に之に着手せるを以て見れば、高等女學校の設立の氣運は到底掩ふべからず。

◎京都府尋常師範學校女子卒業生　は同校創立以來明治二十九年に至るまで總計百五十八人、内同府下に在りて、教員の職に從事せるもの八十八人なりといふ。

時報

◎製作品の天覽

長き迄りにては、曩頃侍從北條氏康氏を、一ッ橋外なる共立女子職業學校に差遣はされ、造花刺繡其他生徒の製作品を　叡覽あるべしとの旨を傳へられたるに付き、同校にては目下夫々生徒をして製作せしめ居るとぞ。

◎外征軍人遺族慰問婦人會の殘務

曩に毛利公爵夫人安子、外貿婦人の發起にかゝる外征軍人死亡者遺族慰問婦人會にては、小松宮御息所賴子殿下の御詠歌一葉に、懇篤なる書翰一通、並に酒肴料金五圓を添へ、六千有餘名の將校下士卒遺族者に向け、已に夫々配贈を了りし次第なるが、此の受領者の範圍は、去廿八年十月三十日遼東半島還付の際まで死亡せし者の遺族にして、同年中の官報に登載せられしものに限りしことなれば、その以後の官報に登載せられし死亡者の遺族並に前年中調査漏れとなりし向より、同會に宛て御詠歌のみにてもと、頻りに請求し來るもの爾來頗る多く、心情默過し難き點もあれば、愈々同會にては各府縣の知事官房に照會し、目下詳細なる員數調査中の由にて、福島縣の如きは已に四百名以上の申込あり。其他全國を併せなば大凡五千名に近き見込にて、遠からず夫々寄贈さるゝことなるべしといふ。

◎海軍婦人の恤兵殘金始末

海軍將校夫人會の募集せし恤兵金中、手富貴寄贈の殘金千五百六十一圓三十五錢三厘は、當座預の利子金四十三圓〇七厘を加へ、其内より諸雜費を引去り、今回同會の役員鮫島峰子、瓜生繁子等より、戰死者坂元海軍少佐以下百八十六名の遺族に、各金八圓三十錢宛寄贈したりと。

◎華族女學校紀念式　本月十三日同校第十一周開校紀念式を擧行したり。

◎婦人共立育兒親會　本月十二日午後一時より小石川大學植物園に於て開きたりとぞ。

◎孝良行賞

秋田縣羽後國由利郡上鄉村
齋藤淸吉繼母　齋藤りへ

平素溫順舅姑及夫に事ふるの道を竭し夫曾て不治の症を患ひ荏苒褥に在るや夙夜衣帶を解かす看護到らざるなきも遂に死亡す後舅姑亦病み長子猶幼少にして操業意の如くならす一家益〻貧窶に陷るも備さに辛苦を嘗め專ら療養を盡すと雖も尋て歿せり傍ら能く家事を理め多年貞操の行洵に奇特とす仍て爲其賞金五圓下賜候事

明治二十九年十月二十六日

秋田縣知事從五位勳六等　岩男三郎

◎靜岡女學校　同校は此程宏壯なる校舍を同市西草深町に新築し、今度更に教員を增聘し、一層擴張せりとぞ。學校は美以美派に屬し、校長はカンニンガム孃なり。

◎熊本縣第二回女子講習科生徒の募集　熊本縣にては二十六年縣令第五號、及び廿八年縣令第三號小學校教員講習科規定に依り、來年一月第二回女子講習科生徒卅一名を募集するよし

◎共立女子職業女學校の增築　該校は近來入學志願者頗る多數なる爲め、今回舊來の校舍の一部を取毀ち更に宏大なる教室を增築するに決し、既に工事に着手したる由。

◎看護婦洋行　常陸國舊石岡藩の名族にて曾て同藩の大參事を勤めし曾我某氏の女鑑爾子(廿一年)といへるは日本赤十字社病院に於て看護術を修め、去廿五年課程を卒へ爾來同院に勤續し居りしが、今回自費を以て英國に赴き、一層看護の術を研究せんことを思立ち本月廿日頃橫濱解纜の郵船に搭し倫敦へ赴任すべき一等領事荒川已次氏の一行に加はりて渡航する由なるが、到着の上は主に彼のナイチンゲール女史の創設に係る、看護學校其の他諸種の病院、救護會などに入り、數年間研修を積まんとの決心なりといふ。同社養成の看護婦にして、社用に連繫し、米國又は上海に渡航せしものなきにあられど、單獨を以て自費洋行を企てしは同女を以て嚆矢となすといふ。

◎クラヽ、バートン孃　赤十字社の一隊を率ゐて、アルメニア救濟に趣きたる米國クラヽ、バートン孃は、先頃本國に歸り、十月九日、華盛頓府に於て盛なる有志の歡迎會に臨みたり。

甲州に遊ぶ記

吾社長は、去二日發程、甲州に入り、市川大門及び甲府に遊べり。十二日歸京するや、直ちに業務あり。よつて左に切拔通信を一集して記事に代へ且つ彼地の同人に謝意を表す、

●巖本善治氏　東京女學雜誌社巖本善治氏は昨日來峽、直ちに西八代郡市川に至り、渡邊氏を訪ひ、即日歸市錦町の談露館に投宿、尙ほ三四日間滯在さるゝ由(十一月五日甲府新聞)。

●巖本善治氏を訪ふ　記者昨巖本善治氏を錦町談露館に訪ひ談會々同氏等が先頃東京に於て組織せられたる宗教家懇和會の事に及ぶ氏曰く(以下略)(六日、山梨日々新聞)

●巖本善治氏の來峽　東京女學雜誌社々主巖本善治氏は一昨日來峽錦町談露館に投宿せり(十一月七日、山梨民報)

●巖本明治女學校長の登廳　兩三日前來縣せられて錦町談露館に投宿し居らるゝ同校長には昨日本縣廳に至りて櫻井知事に面會せられたり(七日、峽中日報)

●巖本氏の演說　常市滯在中なる巖本善治氏は明日櫻町一丁目甲府教會に於て午前十時より演說を爲し又た本日午後より尋常師範學校の講堂に於て教育演說を爲す筈なりし由(七日、山梨日々新聞)

●巖本氏の訪問　巖本善治民は昨朝富岡敬介翁を西山梨郡里垣村の山莊に訪問したり(同前)

●巖本氏の講話　別項記載の東京女學雜誌社々主巖本善治氏は櫻井知事よりの依賴にて本日午前師範學校講堂に於て女子教育に就きて一塲の講話をなす由右に就き尋常中學校職員生徒及甲府學校教員生徒高等三年生以上は午前中の授業を休みて傍聽する筈なりと(七日、山梨民報)

●講話開演　本日午後二時より尋常師範學校樓上に於て巖本善治氏の講話あるよし餘席のある限りは何人にも傍聽を許すといふ(七日、甲府新聞)

●學生傍聽　別項に揭ぐる尋常師範學校に於ける巖本氏の講話につき中學生及び甲府小學校生徒何れも傍聽に趣くよし(同前)

●巖本善治氏の演說　昨日の紙上に記載せるが如く同日當地尋常師範學校講堂内に於て巖本善治氏の演說あり聽衆は同校職員生徒の外公私立學校職員生徒數百名流石に廣き講堂内も立錐の餘地なかりしが氏は「女子の教育」てふ題に就き淸朗なる音吐を以て演すらく(八日、山梨日々新聞)(以下筆記數日連載に付略す)

●巖本善治氏の演說　昨日午後七時より當地英和女學校にて巖本善治氏の演說ありたり二時より四時半に至る　(八日、山梨日々新聞)

●甲府教會の演說　滯峽中なる東京明治女學校長巖本善治氏は一昨日當市櫻町一丁目甲府教會堂に於て「信仰の命」と云ふ演題にて一時間余に亘るの長演說をなし流石に廣き會堂も滿塲立錐の餘地なかりしと因に記す同氏は一兩日中に歸京の途に就く由(十日、山梨民報)

●懇親會　渡邊信、堤江助、野口英夫、黑川雲登、小林陽、新海榮太郎諸氏の首唱にて明九日午後三時より望仙閣へ滯峽中の巖本善治氏を招し懇親會を催ほすよしなるが右の會へは富岡敬明櫻井勉氏等も出席せらるゝ筈なりと(八日、山梨日々新聞)

●巖本氏の楓狩　巖本善治氏は本日御嶽新道の紅葉狩に赴きたり(十日、同前)

●懇親會槪況　昨日午後より望仙閣へ巖本善治氏を招き開會したる懇親會は來會者六十名に達し非常の盛況なりし委細は次號に揭すべし(同前)

●懇親會列席者

(會員)

縣會議員	星野嘉兵衛	縣屬	幡野仙穀
縣會副議長	寺田忠三郎	牧師	小林光泰
醫師	勝格彌	製糸家	風間伊七
師範學校長	小野恒剛	第十銀行頭取	佐竹作太郎
甲府學校長	權太政	甲府市長	高木忠雄
中學校教員	中川太郎	興商銀行頭取	雨宮五郎
檢事正	國分三亥	有志家	三神有長
英和女學校教員	河西璞	山梨日々新聞社員	山本節
有明義塾教員	和田源吉郎	同	齋藤總太郎
牧師	島津岬	精乳舍	林紋次郎
製糸家	矢島富吉	判事	普賢寺轍吉
縣知事	櫻井勉	若尾銀行頭取	若尾民造
參事官	杉山四五郎	技師	友成仲
甲府新聞社主	久保.島保吉		

(發起人)　渡邊信、堤江助、野口英夫、黑川雲登、小林陽、新海榮太郎、

巖本氏歸社、笑つて曰く、新聞紙上の大家を見よと。

明治女學校募集金

第六回報告

金二百圓也	東京小石川	前島密殿
同五十圓也	大阪	三戸よりこ殿
同廿三圓也	靜岡	山田みき子殿
同十八圓也	東京慶應義塾	宮島巖殿
同十八圓也	東京大學院	村上直二郎殿
同十八圓也	東京	大和田村子殿
同十七圓八十錢也	靜岡	伏見きみ子殿
同二圓也	大阪	中村健二郎殿
同一圓也	大阪	丸山直一殿
同一圓七十錢也	長州赤間關	武藤かね子殿
同七十錢也	伊豫	大洲敎會
同一圓也	足利	相馬杢左衞門殿
同七十五錢也	東京	田邊和氣子殿
同三圓也	東京麻布	安川ゑん子殿
同二十錢也	東京	片野類三殿
同四十六錢六厘也	札幌日本基督敎會	無名氏
同二圓五十錢也	岩代國若松	海老名りん子殿
同二圓五十錢也	同	粂子きく子殿
同一圓五十錢也	福島縣尋常師範學校	女子部生一同
同五十錢也	福島	無名女史殿

附錄畫豫告

今般札幌農學校敎諭哲學博士新渡戸稻造氏より本社に宛て、獨逸國繪畫界、近代の絕品傑作の寫眞數葉貸與相成りたるに付き、之を寫眞銅版畫となして、續々本誌に挿入し以て讀者諸氏の高覽に供し、佳趣美想を促がさんとす。由て右預め廣告候也

明治廿年月十一月

女學雜誌社白

十一月五日發行（第百貳拾號）

女鑑

每月二回五日廿日發行
一册定價拾錢三ヶ月分
前金五拾五錢半ヶ年分
金壹圓全國無遞送料

●口畫 下雲 ●挿畫 高橋松亭 ●社說 女子の學事 ●論說 女子教育一斑 三輪田眞佐子 ●貞女兩夫に見えずといふことを 加藤あい子 ●史談 毛利豐前守勝永の妻鹽井ふく子 ●阿部伊岐女 宗村信喜 ●家政 たちぬひ 西山たい子 ●造花伏見藤三郎 ●だいところ ●學園 日本文典 鹽井正男 ●漫錄 東海紀行 ●またぬ青葉 ●井蛙小錄 ●久米幹文翁の婦女論 ●烈女百人一首 ●紋帳圖式綱目 ●國語につきて ●年魚 ●方言 ●鹿鳴草 ●東京廿四景 ●朝露 ●朴平 ●文林 文數章 歌數十首 ●雜報 時事數十件 批評數件 ●敎の庭 兼題歌文數百章

發行所 京橋區築地二丁目二十一番地 國光社 （電話一九四六）

耳科醫院

診察時間每日午前八時より午後三時まで

ドクトル 小此木信六郎

駿河臺南甲賀町十番地

巖本嘉志子英文集

右英文集巖本嘉志子の肖像（アートタイプ）明治女學校々舍及學生の圖（銅版）、傳紀等を添へて出版せり、有志者の購讀をまつ

一册正價六十錢、郵稅四錢

發賣所 東京 女學雜誌社

明治女學校 圖書寄附募集廣告

本年二月五日我校不慮の火災に類燒せし際、多年珍藏の書籍悉く灰燼に歸して、片影をだに留めざるに至れり。然るに我校は大方有志の同情いとも懇篤なるによりて、再築の計畫着々として其途に在ると共に、學校組織中の甚だ重きをなせる智識の倉庫たる書籍館を再興且盛美ならしめんと欲すると切なり。幸に有志の既に、堅牢なる書籍庫の建築寄附を約せらるゝあり、之に充たさんは、五車の書尙ほ尠しとなすべし。由つて天下の仁人に訴ふ、冀くは之に盈て、之れを盛んにせんが爲めに、或は珍藏の美書を割愛せられ、或はまた高著の眞書を寄贈せられ、以て我校をして、永く其芳志を記せしめんことを。

明治廿九年十一月

明治女學校圖書館掛 謹言

○和漢洋書類何種のものにても御寄附相願候
○御寄附なし被下候に於ては、地方にては、運賃立替御送附相願候、然らば請取證差上げ申候際、御返濟可致候也。
○また市內にて候はゞ、御一報次第、受取人差遣し可申候。

日本宗教界評論の評論

日本宗教

十一月二十日刊
第二卷第五號

◉次號には釋雲照師、横井時雄氏、ロイド氏、加藤氏の論を始め久津見息忠氏の社會の罪とは何ぞや●觀潮菴の人生目的論爭を觀る●海老澤氏の禪宗及禪學の誤謬●社會學的宗教觀の性質●獨逸の宗教界●某子の信仰經歷談●社會學會設立に就て（布川靜淵）●其他數篇過半は机上にあり◉

口繪　信望愛

定價一冊八錢郵税五厘　六冊郵税共前金四十八錢

發行所　日本宗教社
東京麹町區下六番町六番地第七號舍

◎歌詠募集

◉季、雜、戀、其題は何にてもよろし。短歌今樣ともに、有志の投詠を待つ。
◉投詠ありたるものは、三宅花圃女史の撰を乞ひ、其秀逸なるものを掲ぐ。
◉所々の歌會の兼題、即題の撰も入りしものは、其儘撰者の名を附して掲ぐ、たゞし天地人の點あひたるものに限る。
◉寄詠は凡て本誌毎月十日發行に載す。

社告

今般女教社發行『大倭心』を本誌に合併致候に就ては是迄『大倭心』の方へ前金御拂込みの讀者諸氏へは引續き本誌相送り可申候間其旨御了承なし被下度候其内御異存有之候向は至急御通報相成度候也

女學雜誌社白

明治廿七年一月十四日內務省許可
明治廿九年十一月廿四日印刷
明治廿九年十一月廿五日發行
發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）



